
あにいも

HEERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あにいも

【Nコード】

N95290

【作者名】

HERO

【あらすじ】

変態兄貴“ 兄介 ”と真面目な妹“ 妹奈 ”が繰り広げるお馬鹿コメディー！

愛は歪むほど燃え上がる。

兄介と妹奈（前書き）

登場人物紹介

>i27674<r u b y><r b>210<

【結坂兄介</r b><r p>(</r p><r t>ゆいさかきょうすけ</r t><r p>)</r p></r u b y>】

地元の大学に通う十九歳。妹の妹奈に恋愛感情を抱いており、それ故度々奇行に走る。

>i27673<r u b y><r b>210<

【結坂妹奈</r b><r p>(</r p><r t>ゆいさかまいなく</r t><r p>)</r p></r u b y>】

兄介の妹。弱冠九歳にして兄よりもしっかりしている。兄介から日夜精神的苦痛を受けているが、なんだかんだで彼を兄として慕っている。

【母】

兄介と妹奈があらぬ関係になってしまわないかといつも心配している。

兄介と妹奈

「うむ、今日もナイスな臀部だ」

家の廊下を歩いている少女の背後に、ヨダレを垂らした怪しい青年が現れ、彼女の尻を大胆にわし掴んだ。

「キャッ！！」

少女は叫びながら上半身を捻り、自分の尻を掴む青年の鼻に強烈なエルボーをお見舞いした。

「ぐお！！ 何てことを！！」

鼻を押さえ、よろめく青年。

「お兄ちゃんが毎日毎日人のお尻を触るからだよ！」

「駄目なのか！？」

「駄目だよ！！」

>i14117—210<

「あらやだ、変わった子…」

>i14118—210<

「何その信じられないって顔！！ 普通の子だよ私は！！」

会話から分かる通り、たった今廊下で発生したセクハラ事件の加害者と被害者、二人は兄妹なのだ。（兄妹というのは血の繋がった男と女のことである）

尻を触られ、エルボーを放ったのが妹、『結坂妹奈』^{ゆいさかまいな}である。年

齢は九歳、小学三年生。

尻を掴み、エルボーを食らわされたのが兄、『結坂兄介』^{ゆいさかきょうすけ}。年齢は十九歳、大学一年生である。

この二人の日常は、平たく言うと、極度のシスターコンプレックスである兄介が、妹である妹奈にセクハラ行為を働き、その度に辛辣な言葉や物理攻撃による反撃をくらわされるという一連の流れの繰り返し。何年もそんなことを続けているので、最近妹奈の攻撃力が異常なまでに高くなってきている。その結果…

「うう…鼻血が止まらない…!!！」

>i33439—210<

「だ、大丈夫、お兄ちゃん!? 私そんなに強くやってないんだけど…。とりあえず、すぐその私の部屋に行こう。鼻にティッシュ詰めて、ベッドで仰向けになってれば止まるよ」

「うむ…（これからのセクハラは命懸けだぜ）」

「お前は本当に優しい子だな…」

妹のベッドで仰向けになり、涙ぐむ兄介。

「な、泣かないでよ! 肘をぶつけたのは私だもん! これは当然の事だよ!」

だが元はと言えば兄介のセクハラが悪い。

「妹奈…お前のベッド…」

「どうしたの? 寝心地悪い?」

「いい匂いだ…」

「ちよ、やめてよ気持ち悪い…」

「ああ…やばい、なんか欲情してきた」

「え…?」

兄介は妹奈の腕を掴み、彼女をベッドの上に押し倒した。

「ちよ、何!? やめてよ!!」

「妹よ、この兄を…男にしてくれええ!!」

「キャアアアアア!!」

妹奈の服を脱がし始める兄介。

「騒がしいわねえ！ 何してるの？」

不意に部屋のドアが開き、母が姿を現した。

「えっ！？ あ…あなた達！！」

息を荒げる兄介。彼の股の間で服を乱して涙ぐむ妹奈。そして…

「そ、それはああ！！」

兄介の鼻血が垂れたのだろう。ベッドに血の染みが出来ていた。

「う……うう……信じられない……私の子供達が……こんな背徳な行いを……。まさか兄妹で一線を越えてしまうなんて……」

「お、お母さん、何か誤解してるよ！」

「言い訳は聞きません！！ 聞いてたまるもんですかああ！！」
母は泣きながら立ち去ってしまった。

「そんなあ……お母さん……」

「何でこんな事になっちゃったんだ……」

「お兄ちゃんのせいでしょ！！」

「ま、いいか。どうせ『一つ』になる予定だったんだ。さ、続き
続き！」

再び妹奈の服を脱がそうとする兄介。

「いい加減にしてよ馬鹿ああああ！！！！」

「はうあああああ！！！！」

妹奈の蹴りが兄介の股間に炸裂した。

兄介と妹奈（後書き）

兄介

「ハア：ハア：蹴られた股間がイタ気持ちいい：」

妹奈

「もう手に負えん」

兄 立て簞もる（前書き）

>	i	1	4	1	1	5	—	2	1	0	<
>	i	1	0	1	4	3	—	2	1	0	<

あらためて、兄妹のイラストを貼付けます。（前回はサイババに邪魔されたので）

兄 立て籠もる

妹奈の部屋の前で佇む一人の男。そう、兄介である。

「きょうび俺がはまっていること、それは妹の部屋への侵入!!」
変態である。

「全裸で!!」

変態過ぎである。

「自慰をしながら!!」

警察はまだか。

今、家にいるのは兄介だけ。母はパート、妹奈はまだ学校にいる。
「大学の講義が午前で終わったからな。今からならたっぷりと楽しめるぜ」

兄介はハアハア言いながら妹奈の部屋へと足を踏み入れた。

「グフフ……今日は『あれ』いくか……!!」

そう言う兄介は部屋の角に配置されている小さなタンスに手を伸ばした。

「したーぎ（下着）を拝見!! うおりゃ!!」

勢いよくタンスの二段目が開かれる。

「フッ、俺の冴え渡る勘は一発で下着を探し当てるのさ」

願わくば、その能力を別の方向に役立ててもらいたい。

「ふむ、これが妹奈のパンツか。よかった、柄は付いていない。

男はいないようだ」

兄介は白いパンツを一枚掴むと、おもむろに自分の足へと通し始

めた。身につける気のようにだ。

「き……きつい！　だがこの感覚……まるで妹に抱擁されているかのようだ……下半身を」

妄想しているのだろう、兄介は天井を仰ぎ、一筋のよだれを垂らした。

「服も着てみよう」

今度は洋服を着だす兄介。小さいので強引に引っ張って体に通している。

「ああゝ凄い……。妹に全身を強く抱きしめられているかのようだ……って、待て待て待て……キツイ……キツイぞこれ！！　特に首元！！　このままじゃ妹に絞め殺される！！」

明らかに血行不良の兄介。顔の色がやばい。

「ただいまゝ！」

「ええ！？」

妹奈が帰ってきた。

（何だと！？　この時間、妹はまだ帰ってこないはず！？　まずいぞ、こんな姿を見られたら『変態』と思われてしまう！！）

何をいまさら！　とはいえ、妹のチュニツクとパンツを身につけたこの状態。見られれば確実に兄妹の縁を切られてしまう。運が良くても体中の毛という毛を筆られる。

妹奈が階段を上がってきた。

（やばいやばい！　早く服を脱がないと！　全裸ならまだ『いつものこと』だし、妹もいまさら何とも思わんだろう）

必死に脱衣を試みる兄介。

（くっ……駄目だ……脱げない！！　ハサミ……！　ハサミ使わんと……！！　ああ、いかん！　妹が来てしまう！！）

兄介は急いでノブを掴み、ドアを引いて開かないようにした。

「あれ？　ドアが開かない……」

何度もノブを回そうとしながら首を傾げる妹奈。

「ひゅゝ、ひゅゝ」

おまけに部屋の中から変な息遣いが聞こえてくる。

「お兄ちゃん？ お兄ちゃんでしょ！？ 何やってんの！？」

「い…いや…その…何でしような…」

「あっ！ 私の部屋荒らしたんでしょ！」

「お、お前の部屋は何一つ荒れちゃいない…！ 本当だ…！ 荒れているは我が心のみ…」

「言ってる意味が分かんないよ。どうして開けてくれないの？」

「なんというか…ちょっとした火遊びをだな…」

「火遊び！？ 私の部屋燃えてるの！？」

「そういう意味じゃないんだ…。まあ俺はお前に萌えているがな…」

「今日のお兄ちゃん、いつも以上におかしいよ？ なんだか苦しそうだし…」

「そ、そうかな…？ お前こそ、今日は何でこんなに早いんだ？」

「明日の遠足に備えて今日は半日授業なの」

「遠足…！？ くそ！ そんなもん俺がブツ潰してやる…！」

「何で…！」

遠足に罪は無い。

（苦しい…一刻も早くこの服を脱衣せねば、俺の命そのものが危うい。だがこの服を脱ぐには両手をドアノブから離す必要がある…。それはそれでバッドエンド…！！ こうなったら無理にでも妹を追い払わないと…）

「早く開けてよお兄ちゃん！」

（しかたない…。こうなったら、『一人二役』大作戦だ！）

この男のことだから、どうせくだらない作戦だろう。

「逃げろ！ すぐ逃げるんだ妹よ…！」

「えっ…？」

兄介は声色を変えた。

『貴様ア！ 余計なことはしゃべるなど言っただはズゲリよ…！』
兄介のものとは思えない、凶太い声。ていうか語尾が凄い。

「今の誰、お兄ちゃん!?　もしかしてその人に脅されてるの!?」

「そ、そうだ!　俺はこいつにドアノブを抑えろと命令されてるんだ!!」

「何故そんな命令を!?!」

『お前、こいつの妹ゲリか!?!』

「だ、だったら何!?　お兄ちゃんを解放して!!」

『いいだろう!　ただし条件があるゲリ!!　ハサミで衣服を切り裂けるくらいの時間……とりあえず十分くらい家の外に出ているゲリ!　そうすれば兄貴を解放してやるゲリ!』

「分かった、十分だね!　(衣服を切り裂けるくらいの時間……?)」

(よし、これでドアを開けられる心配はなくなった。次は妹のハサミを借りて、この服を……)

兄介はドアノブから手を離すと、妹奈の机の引き出しからハサミを取り出した。

(すまない妹よ……。この服は後でこっそり同じのを作っておくから……)

作んのかよ。買ってこいよ。

その頃妹奈は、バットを握って再び階段を上がっていた。

(あんな奴の言うこと信用できないよ。お兄ちゃん、今助けるからね!)

そっと扉を開く妹奈。すると部屋の中には妹奈の服を着た謎の男の背中が。

(な、何あいつ!?)

手にハサミを握り、荒い息を吐く男。

（ハサミ！？ お兄ちゃんが危ない！！）

妹はドアを勢いよく開き、兄介に撲りかかった。

「お兄ちゃんは殺らせない！！」

「なっ！！ 待て！ 俺！ 俺だよ！」

その鬱血した顔は、もはや兄介のものではなかった。

「うっさい！！ この変態！！」

兄介の頭に、容赦なくバットが振り下ろされる。

「ギョエエエエエ！！！」

今回の一件で兄介は大怪我を負い、さらに半月ほど妹に無視され続ける事となった。

「酷い目に遭ったゲリ！」

兄 立て籠もる（後書き）

兄介

「まさかバットで撲られるオチだとはな！
これぞバットエンド！
！」

妹奈

「上手くないよ」

ダメ！絶対！

学校の課外授業で、麻葉やシンナーの恐ろしさを学んだ妹奈。
その日の下校中、彼女の脳裏にある疑惑が浮かぶ。

（お兄ちゃんって、薬やってんじゃないかな…）

酷いぞ妹奈。

だがあの男を毎日見ていたら、そういう疑いも持たざるを得ない
かもしれない。

妹奈は帰宅した。

自分の部屋にランドセルを置くと、すぐさま兄介の部屋を訪ねる。

「お兄ちゃん。ちょっと変なこと聞くけど…」

言いながら扉を開ける妹奈。直後、彼女は衝撃的な光景を目の当たりにする。

「スー、ハー、スー、ハー」

兄介がビニール袋を口に当て、吸って吐いてを繰り返していたの

だ。

「ダメエエエエ!!」

妹奈は兄介を突き飛ばした。

「いってえ! な、何をするんだ妹奈!」

「シンナーなんて吸っちゃダメ!」

「え、シンナー? アハハ、違う違う! これだよ!」

言いながら、兄介はビニール袋から妹奈の靴下を取り出した。

「あ、私の靴下を嗅いでたんだ! ごめんお兄ちゃん、はやとちりしちゃった…」

「フフ、気にするな」

二人の明るい笑い声が家中に広がる。

「それはそれでエエエエ!!」

妹奈は兄介を突き飛ばした。

ダメ！絶対！（後書き）

妹奈

「靴下を嗅がれるくらいなら、まだ薬やっってもらった方が良かったよ」

兄介

「そんなに嫌か」

風林火山（前書き）

風林火山の意味が微妙に違っていますが、悪しからず。

風林火山

扉を開け、自分の部屋から出てきた妹奈。そんな彼女の尻を、背後を通った『何か』が触れていった。

「キャッ！ 何今の！？」

妹奈は尻を押さえながら辺りの様子を伺った。

「あっ、お兄ちゃん！！」

五メートル程先に位置する廊下の突き当たりで、兄介が背を向けたまま中腰となっている。彼は人間離れしたスピードで移動し、すれ違い様に妹奈の尻を触ったのだ。

兄介は微笑を浮かべながらゆっくりと首を捻り、今にも怒りだしそうな妹奈を見据えた。

「疾^{はや}きこと風の如く！！」

>i11128—210<

部屋で着替えをする妹奈。実はその部屋には兄介が潜んでおり、彼女が一枚一枚衣服を脱いでいく様子を、気配を絶った状態でまじまじと見つめていた。

（徐^{しず}かなること林の如く！！）

>i11129—210<

風呂で湯舟に浸かる妹奈。突然ドアが開き、全裸の兄介が乱入してきた。

「ちよっ、何で勝手に入ってくるの!？」

戸惑う妹奈に構う事なく、奇声を上げながら彼女に飛び掛かる兄介。

「嫌アアアアアア!!!!!」

「侵(犯)し掠^{かす}めること火の如く!!」

>i1130—210<

「お兄ちゃん!! 早く!! 早くしてよ!!」

泣き叫ぶような声を上げながらトイレのドアを叩く妹奈。

「もう駄目!! 限界なの!! お願いだから:!!」

レッドゾーンに突入したのだろう。妹奈は内股となり、身体をぶるぶると震わせ始めた。

「お兄ちゃああああん!!」

外で妹奈が大変な事になっているというのに、兄介は笑みを浮かべたまま便座に腰掛けていた。彼はドアの向こうでピンチになっている妹を想像して興奮しているらしい。しかも右手が怪しい動きをしている。

「動かざること山の如し!! (右手は動いているが)」

>i25334—210<

妹奈はこの日兄介にされた事を全て母親に話した。

それにより兄介は母にこっぴどく叱られ、妹奈には大量のプリン（上に生クリームの乗ったやつ）を買わされる事となる。

風林火山（後書き）

妹奈

「『侵し掠めること火の如く』の時、お兄ちゃん全裸だったんだよ
ね？ それなのに何で挿絵では服を着てたんだろ？」

兄介

「妹よ、大人になりなさい」

なぞなぞ（前書き）

妹奈

「今回はなぞなぞのお話だよ」

兄介

「謎と言えば妹奈だよな」

妹奈

「え、私の何が謎なの？」

兄介

「こんなに素敵な兄を男として見られないんじゃないか」

妹奈

「たいていの妹はそうだよ」

なぞなぞ

「お兄ちゃん、学校で『なぞなぞの本』を借りてきたよ！」
小学校から帰ってきた妹奈が、嬉しそうに借りてきた本を兄介に見せる。

「お前は本当になぞなぞが好きだな！」

「えへへ、まあね」

妹奈はよくなぞなぞの本を借りてくるのだ。

「この前なんか、なぞなぞの本の角でイッてたしな！」

「え、なんの話？」

妹奈はまだそんなことしない。

「さあお兄ちゃん、今日もなぞなぞ出すから答えてみて」

「お、おう！」

妹奈はいつもこうして兄介に本の中のなぞなぞを出題するのだ。

『出題者』になることで兄より優位に立てる、その感覚が嬉しいのだろう。

では、妹奈の出すなぞなぞを、皆さんも一緒に考えてみてください。
い。

【Q】切っても切っても切れないものはなんだ？

兄介

「簡単簡単！ 『兄妹の絆』！」

妹奈

「違う！ 答えは『トランプ』！！」

【Q】動きが早い虫は？

兄介

「『スカイフィッシュ』」

妹奈

「UMAじゃん！ 答えは『ハエ』だよ！！」

【Q】赤い帽子を被って涙を流す人は誰？

兄介

「赤い帽子…なるほど、血の比喻か。『志し半ばで撲殺された野心家』」

妹奈

「怖いよ！ 答えは『ろうそく』！！」

【Q】雨降りに背が伸びる物は何？

兄介

「たいていの人間は、雨の日はあまり外に出ないからな…。部屋で

することと言えば“アレ”しかないだろ。つまり伸びるのは『ちん
○』」

妹奈

「違う！ 『折り畳み傘』だよ！！ 何でそんな答えになるの！？
最低だよ！」

【Q】家の中で座ると高くなり立ち上がると低くなる物は何？

兄介

「“アレ”は基本、座ってやるものだ。立ち上がる時にはたいい
低くなっている。つまり答えは『ち○こ』」

妹奈

「そればっかじゃん！ 『天井』だよ答えは！！」

【Q】一本ずつじゃないと売ってくれない花は何？

兄介

「『ラフレッシュ』」

妹奈

「そりゃ纏めて買うのは大変だけれども！ 答えは『バラ』だよ！
！」

【Q】うえの上には何がある？

兄介

「神の上には：『界王』がいた」

妹奈

「何の話してんの！？ 答えは『あい（うえお）』だよ！！」

【Q】海の中で使う電気製品は何？

兄介

「『常識的に考えてそんなものは……無い』」

妹奈

「『懐中電灯』だよ！！ 何で急に冷静になるの！？」

【Q】教えてもらいたがっているゲームは何？

兄介

「『ど〇でもいっ〇よ』」

妹奈

「世代じゃないから分かんないよ！ 答えは『オセロ』！！」

【Q】かぶっていた帽子が風で飛ばされました、その時どうしたでしょう？

兄介

「『あれ？ 前にも今と同じことが…』」

妹奈

「デジャブかい！ 答えは『はっと（ハット）した』！！」

【Q】上は洪水、下は大火事、これなんだ？

兄介

「『冥府』」

妹奈

「ちよつと納得しちゃったよ！ 答えは『風呂』！！」

【Q】減っても減ってもなくならない物なくんだ？

兄介

「減ったと思ったら増えてるってことだよな…『借金』」

妹奈

「うっ…なぞなぞはもっと明るいものだからね！ 答えは『お腹だよー！！』」

【Q】食べれば食べるほど怒られる草は何？

兄介

「『自分にとってはただの食べられる野草だった。しかし彼女にとっては死別した想い人の生まれ変わりとも言える大切な草だった』」

妹奈

「興味深いストーリーだけど答えは『道草』ね！！」

【Q】騙すのが得意な鳥は？

兄介

「これは解る。『カケス』だ。他の鳥の鳴き声やチェーンソーの音を真似する事ができるらしい。アフリカ大陸やユーラシア大陸、日本では九州の辺りに…」

妹奈

「『サギ』ね！！」

「お兄ちゃん……もうなぞなぞ止めようか……」

妹は憐憫の眼差しで兄を見た。

「な…何でだよ？ 俺、これでも真剣にやってるんだぜ？」

「うん、知ってるよ…。だから耐えられないの…。…」
「…………え？」

皆さんはこの兄のように妹を悲しませたりしないよう、気をつけてください。

なぞなぞ（後書き）

兄介

「今度は俺がなぞなぞを出してやる」

妹奈

「えー、どうせ変ななぞなぞなんでしょ？」

兄介

「ふっふっふっ、まあ聞いてもらいなさいな！」

【Q】真ん中が食べられない食べ物は何でしょう？

妹奈

「あっ、簡単だよ！ 答えは『ドーナッツ』でしょ！」

兄介

「ブッブー！ 正解は…」

>i3567—210<

今のままでいい(前書き)

妹奈に怒られた兄介が普通の兄になってしまう…!?

>i30994—210<

今のままでいい

容器から取り出され、薄い皿の上でプルプルと震えるプリン。ソファーに腰掛けた妹奈は、満面の笑みを浮かべてそれを見つめていた。

「エヘヘ、プリンタイム！ 嫌な事をぜーんぶ忘れられる素敵なお時間！ これがあるから頑張れるんだよね！」

彼女の精神は弱冠九歳にして、OLの域に達している。

さて、彼女の言う『嫌な事』とは主に何なのだろうか？ それはやはり、この男の存在だろう。

「ハッハッハー！ ！ この時を待っていたぞよ、マイシスターよ！」

ソファーの裏から妹奈の兄、兄介が姿を現した。何故トランクス一枚なのかは謎である。

「苦節四時間半…！ 俺はここでずううっと、お前が大好物のカスタアアドプディングに手をつけるのを待あああっていたのだあああ！」

言い方がウザい。

「ええ！？ な、何でそんな所で四時間半も！？ 何が目的なの！？」

兄介は床を蹴って飛び上がり、空中でムーンサルトをした後そのまま妹奈の隣へと腰掛けた。そして彼女の手からスプーンを取り上げる。

「愛する二人にスプーンなど必要ナッシング！」

「はあっ！？」

「妹よ…：今日こそあれをやろう！ マウス・トゥー・マウス！ 逆から言うスウマーウ…：知るかボケェ！！」

どうやらこの男の目的は、妹奈とプリンの口移しをする事だったらしい。

「そおれ、吸引と書いてバキューム!!」

言いながら兄介は皿の上のプリンをカービィのように吸い込んだ。

「ああ!!!!」

「はい、うゝゝゝ」

口をすぼめて妹奈に顔を近づける兄介。そんな彼の顔を妹奈の右フックが捉える。

「ブーーーーーーー!!」

さながら激しい吐血の如く、兄介の口からプリンが吹き出した。

「お兄ちゃんは……私の安らぎの時間まで奪っていくの……?」

いつもいつも変な嫌がらせばかりして……」

「い、い、い、嫌がらせえええええ!!? ま、待ってくれ!

誤解だ! これは俺なりの愛情表現で……」

「そんな愛情表現じゃない! 普通のお兄ちゃんなら絶対にこんな事しないよ! こんな変なお兄ちゃんは嫌!!」

「なっ……!!?」

さすがに精神的ダメージが大き過ぎたのだろう、兄介はその場でふさぎ込み、二分程ドナドナを口ずさんだ。

「すまなかった……。今この瞬間から俺はまともな兄を心掛けるよ……」

「まともな……お兄ちゃん……?」

「ああ……。とりあえず今から本屋で『普通の兄貴』って本を買ってくる」

「何その本!?!」

三十分後、兄介は本当にその本を買ってきた。千九百八十円だった。

それからというものの、兄介はどこにでもいるような普通の、いや、それどころか模範となるような兄へと変貌し、妹に対してのセクハラはめっきり行わなくなった。

（凄い…。本当にお兄ちゃんが普通になっちゃった。階段上がる時に下から覗いてこないし、お風呂にも乱入してこない。そして何より、夜中に襲ってこない…。毎日がとても平和に感じられる…。）人間として当たり前の素行をしているだけなのに、妹に凄いと思われる兄介は違う意味で凄い。

妹奈は溜息をついた。

（あれ？ 何で私溜息なんか…。もうお兄ちゃんに変な事される心配はないのに…。慣れてないから…。？ そうだよ、慣れてないからだよ、普通のお兄ちゃんがいる今の生活に…。人間って日常の変化に憧れと恐怖を抱く生き物だって聞いた事がある。例えば良い方向に変わったとしても、慣れるまでは戸惑うものなんだよ…。きつと）

妹奈はソファアに座り、テーブルの上のプリンを食べ始めた。周りを気にしながら。

（来るわけないよね…）

その時だった。妹奈の背後、ソファアの裏側から「おいおいおい」という男の泣き声が聞こえ始めた。

「この妙な泣き声は、お兄…ちゃん…？」

妹奈は動きを止め、振り向く事なく尋ねた。

「うう…妹よ…。ごめんよ、約束したのに…。だけど、もう耐えられそうにないんだよ…。」

（お、お兄ちゃん…）

数秒の間を置き、今度は妹奈が口を開く。

「お兄ちゃん、私もだよ…。ごめん…。ごめんね…。！」
涙を流し、嗚咽を漏らす妹奈。

「プリン…買ってきたんだ。一緒にどうだ…？。」

「えっ…？ 口移し…？」

「だ〜いじょうぶ、そんな事しないよ」

「どうだ？ 新発売、『ムチムチクチュクプリンプリン』の味は」

「うん、美味しい…！ 名前は酷くいやらしいけど…」

兄介がすくったプリンを妹奈が、妹奈がすくったプリンを兄介が口にする。実にほほえましい光景である。

（なんだかんだ言っ、お兄ちゃん私の事を考えてくれてたんだよね…。辛いのに無理して普通のお兄ちゃんになろうとしてくれたんだもん…。私…そんな事は最初から分かったはずなのに…。例え変態でも私を大切に思ってくれている、そんなお兄ちゃんが我慢だったのに…。）

妹奈は大好きなプリンを奪われた事でついカツとなり、心にもない事を言ってしまったのだろう。

「プリンは美味しいな、妹よ」

笑顔を浮かべ、プリンを妹奈の口に運んでやる兄介。

（やっぱりお兄ちゃんは今のままでいい。でも…でも一つだけ…：一つだけどうしても今ここで文句を言っておかなきゃいけない事がある…。いい雰囲気になったばかりだけど、これを許す事は絶対に出来ない…。！）

妹奈はつと立ち上がり、兄介の股間を指差して叫んだ。

「何でパンツ履いてないの…!!？」

兄、まさかの全裸…!!

今のままでいい(後書き)

兄介

「お前はいつになったら俺の裸に慣れるんだ？」

妹奈

「お兄ちゃんが服着ればいい話でしょ…」

兄介

「お前の前では全てをさらけ出していたんだよ。ほら尻の穴！」

妹奈

「キャアア！！」

兄介

「ほらほらちゃんと見てくれよ尻の穴！！」

妹奈

「こっちこないで！ 殴るよ！」

兄介

「ほらほらほら——尻の穴！！」

妹奈

「てえい！！」

兄介

「はう！！！！」

妹奈

「キャアア!! 私の手がお尻の中にいい!!!!」

しばらく抜けませんでした。

花粉地獄！（前書き）

兄妹に花粉地獄が襲いかかる！！

花粉地獄！

「クシュン！」

「ハックショーイ！」

小さくかわいらしいクシャミと、大きく大胆なクシャミの音が同時にリビングで鳴り響いた。

「キイイイ！ 恨めしい、恨めしいぞ『花粉』め！！ 百代先まで呪ってくれるわああ！！」

マスクをあごまで下げ、呪詛を口にしながら鼻をかむ兄介。

「目がああ…目がああ…！！！」

固く閉じられた瞼から漏れる涙を必死に手で拭う妹奈。

二人は花粉症に悩まされていた。

「それにしても妹よ、お前のクシャミは凄いな。クシャミの度、お前の背後にオッサンが見えるぞ」

「うーん…私のクシャミってそんなに大きいかな…」

先程の『ハックショーイ！』はなんと妹奈のクシャミだった。

「ぬうう…万物あらゆるものに神が宿っているのだとしたら、花粉にも『花粉神』^{かふんしん}が存在するという事になる…。もしかしたら花粉症は、自然を大切にしない人間に対する花粉神の怒りなのかも…ふうあ…ふうあ…クシュン！」

わけの分からん兄介の思考は、再び発生した彼自身のかわいいクシャミによって妨げられた。

「キャッ！ お兄ちゃん、何でクシャミする時、わざわざマスク外すの！？ 汚いでしょ！」

クシャミをする度にマスクをあごまで下ろす兄介。そんな彼の行動を妹奈は苛立った口調で批判した。

「んな事言っちゃって、マスクの裏側に鼻水が付いたら最悪だろ？ マスクの中にゴツキーホイホイが出来るんだぞ？ そんな状況に耐えられるのは変態くらいのもんだぜ！」

じゃあ耐えられるだろ。

「もう嫌だああ！ 薬もマスクも全然効果無いよー！！ 何かいい方法は無いの！？」

妹奈は真っ赤な瞳に目薬を点しながら嘆くように不満を口にした。それを聞いていた兄介はマスクを下ろし、鼻水まみれの口を開く。

「ばびじゅだげ、じょびぶば…」

「ちょ、汚いよお兄ちゃん！！ 口に鼻水入ってて何言ってるか分かんないし！！」

妹奈に言われて初めて気付いたのか、兄介は驚いた表情で口元の鼻水を右手で掴んで拭った。

（手で…！？）

妹奈の視線は鼻水を掴んだ兄介の右手にくぎづけとなる。

「それで、さっき俺が言おうとしてた事だけど…」

綺麗になった口で再び話しだす兄介。彼の右手がさりげなく妹奈の股間へと接近する。

「は、鼻水のついた手で触るなー！！」

妹奈はギリギリのタイミングで兄介の鼻水ハンドをチョップで退けた。右手に注意しておいたのは正解だったようだ。

「いてて…じゃあ鼻水ついてなかったら触ってもいいのか？」

「駄目に決まってるでしょ！」

そりゃそうだ。

「なら俺の右手が美味しいプリンで出来てたら？」

「…：あ…ある程度は許すよ…：…」

いいのか妹奈よ？

「で、お兄ちゃん、何言おうとしてたの？」

「ああ、そうそう、鼻水を何とかする方法を思い付いたんだ」

「えっ！ どんな方法なの？」

「まず妹奈が仰向けになる」

この時点でもう嫌な予感しかしない。

「次に向かい合う顔が上下逆になるように、俺が頭側から妹奈を

見下ろす」

言いながら兄介は妹奈を促し、実際にその状況を再現した。

「そして俺が妹奈の鼻に口を当て、妹奈は俺の鼻に口を当てる。んで、出てくる鼻水を口で吸い合う!!」

「嫌ああああ!!!!」

>i1614—210<

地獄絵図!!

「さあ妹よ、レッツ・トライ!!」

「や、やめて!! そんな事したら一生口聞いてあげないから!!」

「ええっ!!!? 画期的な方法故、感心してくれるかと期待していたんだが…」

「するわけないでしょ! もう、何で馬鹿なの!?!」

兄介は妹に『何で馬鹿なの?』と言われた。

「まあお前がそんなに嫌がるのなら仕方ないな…」

兄介は残念そうな面持ちで再びマスクを付けると、妹奈の上半身を起こし始めた。だが彼女の上半身が四十五度くらいの角度まで持ち上がった時…

「ふうあ…ふうあ…」

またもや鼻のムズムズが兄介を襲う。

「キャッ!」

兄介に手を離された妹奈は、背中から床に落下した。

「ふうあ…ふうあ…」

今まさに撃ち出されようとしている兄介のクシャミ。床で仰向けになっている妹奈が悲鳴を上げる。

「お願い!! (マスクの) 中に出して!!」

しかしその願いは兄介に届かなかった。

「クッショブフオオオオン!!」

「キャアアア!!」

兄介はマスクを外し、スコールさながらの本日最大級クシャミを妹奈の顔面にクリーンヒットさせた。

「う…うう…ベタベタ…によりによって何で顔に…ああ…髪まで……」

半泣きになりながら体を起こし、殺意の眼差しで兄介を見遣る妹奈。

「す、すまん…」

「もう…（マスクの）中に出してって言ったのに…」

「だって…中に出したら（ゴッキーホイホイが）出来ちゃうだろ…？」

「そうだけど…」

二人の会話が途切れたその時だった。

突然リビングの扉が開かれ、悲愴に満ちた表情の母がその姿を現す。

「け…けけけ…汚らわしい！ 汚らわしいわ！ 中に出して！？ 出来ちゃう！？ あんた達兄妹でしょ！！」

「えっ！？ ちょっと、お母さん何言ってるの！？」

髪や顔をジェル状の液体（もちろん鼻水）でベタベタにし、ハアハアと息を荒げた（鼻づまりで苦しい）妹奈が母の元へと歩み寄る。

「そんな状態でこっちに來ないで！！ 妹奈、『貴女だけは』まともな子だと信じてたのに！！」

「えっ！？ えっ！？ 意味分かんない！ 意味分かんないよお！」

「お母さんは出ていきます！！」

母は妹奈を振り切り、家から飛び出していった。

「うううむ…家庭崩壊まで巻き起こすとは、花粉神の怒り、恐るべし……！！」

腕組みをし、鼻を吸いながら呟く兄介。

「全部お兄ちゃんのせいでしょうー！！！！」

そんな彼の顔面に妹奈の跳び蹴りが炸裂した。

花粉地獄！（後書き）

兄介

「過剰な防衛システムが主を苦しめる、それが花粉症！」

妹奈

「あ、なんかカッコイイ」

餃子を作ろう！（前書き）

頭が暴走しまくりの母！

餃子を作ろう！

母は一人、悩んでいた。

「どうも兄介と妹奈の関係が健全なものとは思えない…。あの二人、血の繋がった兄妹でありながら陰で良からぬ事をしてるんじゃないかしら…」

しばらく考えを巡らせた後、母は静かに首を横に振った。

「決めつけるのはまだ早いわね。もう少し様子を見なきゃ」

母は兄介と妹奈をキッチンに呼んだ。

「どうしたんだ母さん？ 夕飯の時間にやまだ早いだろう」

「その夕飯の準備を、あんた達二人にも手伝ってもらおうと思ってる」

「なんだ手伝いか…。別にいいんだけどさ」

兄介はやや面倒臭そうなそぶりを見せたが、妹奈の方は「やるやる！」と乗り気だった。

「お、女の子が『やるやる！』なんて言わないの！ はしたない！！」

「え？ 何で…」

叱られた理由が分からず困惑する妹奈。今回ばかりは母の想像力が豊か過ぎた。

（さて、共同作業の中で二人がボロを出すかどうか、監視するわよ）

どうやら母は夕飯の準備を兄妹に手伝わせ、その間彼らの言動を

チェックするつもりらしい。

「それでお母さん、今晚のおかずは何なの？」

「餃子よ！」

ステンレス製のボールに入れられた餃子の種、そして皮が用意された。

「よっしゃー、準備はできた！ さあ妹よ、餃……ゴホッ……子作りのスタートだ！ 俺の種を受け取ってくれ！」

言いながらスプーンで餃子の種を掬う兄介。

（えっ！？ えっ！？ 今兄介『子作り』って言った！？ …いや、違う、変なタイミングで咳をしたから『餃子作り』が『餃……子作り』になってしまったんだわ……。というか文章の上ではそう見えても、実際の音は『子^こ』じゃなくて『子^ざ』だから聞き間違えるはずないんだけど……。あっ、でもその後『俺の種を受け取れ』って言ったわ！ やっぱり最初からそういう意味で言ったのねイヤらしい！！）

母は凄い形相で今度は妹奈の方に視線を向けた。

妹奈は兄介が乗せてくれた餃子の種を一生懸命皮に包んでいる。

「だ……駄目！ お兄ちゃんの種……凄い量！！ ああ！（閉じた皮の）割れ目から種が溢れてる！！ お兄ちゃんの種が、割れ目から……！！」

もはや狙ったとは思えない妹奈の怪しい発言。母の我慢がついに限界を超えた。

「こ……この馬鹿兄妹……！」

「いきなり何だよ母さん……！」

夕食の時間になった。

「手伝った分いつもより美味しく感じるね！」

「そうだな！」

美味しそうに餃子を頬張る三人。

餃子は次第にその数を減らしていき、ついに残り一個となった。

「あっ」

最後の餃子を前にし、兄介と妹奈の箸が止まる。二人ともラスト一個を狙っていたようだ。

二人は互いに譲り合った。

「妹奈、食べていいぞ」

「ううん、お兄ちゃんが食べて。年上なんだから」

「おいおい、妹が遠慮すんなって」

そのやり取りを見ていた母が突然立ち上がる。

「そう！！ それなのよお母さんが見たかったのはー！！！」

「ど、どうした母さん！？」

「それこそがアア、それこそが『普通の兄妹』なのよー！！！！」
啞然とする兄妹の前でひたすら泣き叫ぶ母。

「普通の母さんがよかったな、妹奈」

「え、あ…うん…」

餃子を作ろう！（後書き）

兄介

「今回もバグッてたなあ、母さん」

妹奈

「う…うん…」

母

「誰がバグッてるって!？」

兄介

「うおっ!! 後書きにまで出てくんない!!」

兄の厄日（前書き）

占いの結果なんて自分に都合の良いもんだけ受け入れときゃいいのさ！

兄の厄日

ソファで大人向け雑誌を読む妹奈の元に、兄介が歩み寄る。

「おませさんだな、そんな雑誌を読むなんて」

「あ、子供扱いしてる!」

9歳は子供だよ。

「そんなことよりお兄ちゃん、この雑誌に載ってる占い、すっごく当たるんだよ! お兄ちゃんのも見てあげる!」

「占い? 拙者、そういうものは全く信用しとらんでござるの巻」

「いいから、いいから!」

興味なさ気な兄介に構うことなく、妹奈は雑誌の開かれたページを指でなぞり始めた。

「お兄ちゃんの誕生日は……あつた!」

「何て書いてある?」

なんだかんだ言って食いついてる兄介。

「えっとねえ、今日のお兄ちゃんの運勢は……えっ!」

妹奈が突然、驚きの声をあげた。

「ど、どうした!」

ゆっくり雑誌を閉じ、青ざめた表情で兄介を見る妹奈。

「お兄ちゃん、今日は外へ出ない方がいいよ……」

「なにゆえ!」

「だって、今日のお兄ちゃんの運勢、超超超最悪なんだもん」

僅かな沈黙の後、兄介はフツと鼻で笑った。

「いいか、妹奈。お前はまだ幼いから知らんだろうが、占いってちゅーもんは適当くく楽しむお遊びみたいなもんなんだよ。悪い結果だから外に出ないなんてのは、占い依存症を患ったかわいそうな奴くらいだぜ?」

妹奈はすぐさまそれに反論する。

「わ、私だって最初はそう思ってたよ! でもこの雑誌の占いは

別なの！」

「別…？」

「最高の運勢だった人が宝くじで一億円を手に入れ、最悪の運勢だった人が事故で大怪我を負う…。そんなことが次々と起きてるんだよ」

兄介は軽く溜息をついた。

「そんなの簡単に説明がつく。まず宝くじだけど、ああいうのが好きな奴の多くは、買う前に占いとかチェックしてるもんだろ？宝くじを買う奴が高い割合で占いをチェックしてたとなりや、当選した奴の中に『占いのおかげでーす』なんてのがいてもおかしくない」

「じゃあ事故は？」

「意識し過ぎて自らドジ踏んだんだろ。よくある話だ」

そう言い切ると、兄介はリビングから出ていった。

「あー、腹減った。確かカップ焼きそばがあったはず…」
キッチン戸棚を漁る兄介。

「お兄ちゃん…カップ焼きそばを食べる気？」

「ああ」

「駄目だよ、お湯で大火傷を負っちゃうよ！」

「だーいじょーぶだって！ お、発見！」

兄介は見つけたカップ焼きそばを戸棚から取り出すと、それをテーブルの上に置き、手際よくお湯を入れる準備をした。

「気をつけてよ…」

「な、何だよその三点リーダーは。緊張するだろー」

ポットからカップ焼きそばにお湯が注がれる。
「よし、あとは3分待って湯を捨てるだけだ」

――3分後。

「さあ、お湯を捨てるぞ」

「お兄ちゃん、私がやってあげようか？」

「それは駄目だ！ お前にやってももらったら、占いを信用したことになるてしまう！」

「頑固！」

「お互い様な気もするが…」

兄介はカップ焼きそばの湯切り口を開け、中のお湯を流しに捨て始めた。

慎重に、慎重に、火傷をしないように。占いなんかには負けないように。

だがその時、信じられないことが起こった。

「う、うおおお!!」

「キャアアアア!!」

叫ぶ兄妹。

>i24356―210<

「ゆ、湯切り口から、『麺が全部』出やがった!!」

「ありえない……こんなことって……」

流れ出てしまった麺を呆然と眺める二人。

「どんな確率だよ…」

兄はその場に膝をついた。だがすぐに立ち上がった。

「いや待てよ。これ逆に運がいいんじゃないか？　こんな経験したの俺くらいだぞ！」

「うわ、ポジティブ！」

兄介は妹奈の頭を軽くぽんぽんと叩いた。

「分かったか、妹奈。占いの結果なんかで悪いことなんて起きやしないんだよ」

「無理してない？」

「してない」

そう言い残して兄介はキッチンを立ち去った。

「お兄ちゃん、どこ行くの？」

外用の服を着て玄関に向かう兄介を、妹奈が呼び止めた。

「ちよつと隣街に用があつてな」

「外は危ないよ…。またさっきみたいなきことが起きたら…」

「だから、さっきのはラッキーなんだって」

まだ言うか。

「お兄ちゃん、せめて車を運転するのはやめて」

「え…」

「お願い…」

「うっ…そんな眼をされたら断れないじゃないか。分かった、不本意だがバスを使おう」

兄介がそう言うと、安心したのか妹奈はニコリと笑った。その笑顔を見た兄介は可愛さのあまり鼻血を垂らした。

（帰ったら…襲おう）

隣街での用事を済ませ、帰りのバスに揺られる兄介。

彼の視線は窓の外の風景…ではなく、運転手の横で出刃包丁を構える男。

「ふざけんな…何でバスジャックに遭ってんだよ…」

兄介はイライラした様子で犯人を睨み付けた。

（これがあの占いの結果だったのか？ 認めねえ…ぜってー認めねえ！！）

握り拳を作り、立ち上がりとする兄介。そんな彼の腕を、隣に座る女子高生が慌てて掴む。

> i 2 4 3 6 5 — 2 1 0 <

「やめてください、危ないですって…」

兄介は再び席に腰を下ろすと、女子高生の肩に手を置き、優しく微笑んだ。

> i 2 4 3 6 4 — 2 1 0 <

女子高生は顔を朱くしながら「え…あの…」と声を漏らした。

> i 2 4 3 6 5 — 2 1 0 <

「使い捨てキャラがでしゃばってんじゃねえ」

> i 2 4 3 6 6 — 2 1 0 <

兄介から放たれた辛辣な一言に、女子高生は凍り付く。

「さて、運命を切り開くでしょう…」

席を立ち、兄介は犯人目掛けて駆け出した。

「な、何だテメーは！ 止まれ、ブツ殺すぞ！！」と凶器を振り上げる犯人。

「やかましい！！」

バスが停車した。ドアが開き、中から傷だらけの兄介が降りてきた。

「へ：へへ：なんだよ、勝てるじゃねーかよ…。全然ツイてなくねーじゃん。やっぱ占いなんか嘘っぱちなんだよ…」

ぽたぽた血を垂らしながら、家を目指して歩き出す兄介。
(病院に行ったら負けだ。ダメージのでかさを認めることは、占いの結果を認めることに繋がる)

どんだけ意地っ張りなんだよ。

(頼むぜ：もう何も起きないでくれよ…)

そう願いながら、兄介は少しずつ着実に帰路を進む。

——だが、運命は彼を放ってはおかなかった。

「グルルル…」

突然唸り声が聞こえたかと思うと、一頭の肉食獣が兄介の前に現れた。

「ほう…いい度胸してんな、テメェ…！」

怒りに満ちた声で相手を威嚇する兄介。

「おい、逃げろ！！ そいつは動物園から脱走したトラだ！！」
屋根の上に避難しているオッサンが兄介に向かって叫ぶ。

「うるせー！！ あんたも占いなんか信じてんのか！！」

「何を言っとなるんだね君は！！」

そんなやり取りに割り込むかのように、トラが兄介目掛けて飛び掛かってきた。

「上等だゴルァァァ！！！」

兄介は怯むことなく、迫り来るトラを迎え撃った。

「た…ただいま…」

なんとか家にたどり着いた兄介。

「お帰りお兄ちゃん！ 今ニュースが凄いんだよ、バスジャックとか脱走したトラとか…って、キャァァァァ！！」

玄関に佇む血だらけの兄介を見て、妹奈は悲鳴をあげた。

「どうしたんだよ、そんな声出して…」

「きゅきゅきゅ救急車！ 救急車呼ばなきゃ！！」

「妹奈、余計なことはするな…。俺は負けたくないんだよ、占いなんかに…」

「何馬鹿なことやってんの！！ そんな怪我、ほっといちゃ駄目だよ！！」

「大丈夫…。こんな傷、お前を抱けばすぐに癒える」

言いながら、兄介は妹奈を抱きしめ、キスを迫った。

「やめてよ！！」

「ギャァァァ！！」

妹奈は兄介の傷にデコピンをかました。

「こっちは本気で心配してるのに！ お兄ちゃんなんか大嫌い！
」

そう言って兄介の元を去る妹奈。

「そ、そんなああ！」

一人残された兄介は、力無くその場に崩れ落ちた。

「妹奈に嫌われた…。最悪の日だ…」

兄の厄日（後書き）

以前、テレビ番組で“世界一ツイてる男”みたいなのが紹介されていました。

その男は何度死の淵に立たされても、奇跡の復活を遂げてきたというのです。

何度も死の淵に立たされてる時点で、むちゃくちゃツイてねえ気がするんですが、出演者からそういったツツコミはありませんでした。

妹 男友達を招く（前書き）

登場人物紹介

【佳】

気弱でムツツリな妹奈の男友達。
妹奈に好意を抱いている。

【岡島さん】

入院してきた兄介にいつも振り回される女性。
美人ナースとして患者達からもてはやされているため、兄介の態度には少なからずプライドを傷つけられている。

妹 男友達を招く

「ゆゑ結坂さん！」

学校の帰り道、ウニ頭の少年が緊張した面持ちで妹奈に声をかける。

「あ、佳君^{かい}。どうしたの？」

少年は佳と言うらしい。『海』という字の方がウニっぽくてよかったのだが。残念である。

「あ、明後日の日曜、遊べないかな！」

思い切った様子で尋ねる佳。

「明後日？ うん、いいよ。うちに来る？ クッキーとか焼くけど」

クッキーだなんて、しずかちゃんじゃあるまいし。

「ええ！ 結坂さんの家に！？」

妹奈の返事がよほど意外だったのだろう、佳は華麗なアクションで驚きを表現した。一瞬だけ彼の姿が中世の貴族と重なる。

「うわ、凄い動き！ 今、ヴァルタニアン・ロンドバーツ3世（1273～1346）が見えたよ！」

>i26163—210<

※架空の人物です。

「ご、ごめん。だって家に呼んでくれるなんて初めてだから」

「今はお兄ちゃんが入院してるからね。男友達を招待するなら今しかないんだよ」

「え、お兄さん入院してるの？」

「一昨日、バスジャック犯とトラに襲われたみたいで…」

「ちょ、ツイてなさ過ぎでしょそれ！」

「一応、どっちもボコボコにしたみたいだけど」

「お兄さん、人間！？」

咄嗟に失礼な言葉を口にする佳。

「かろうじて人間…かな。お兄ちゃん変態なの…」
妹奈の中で変態は、人外すれらしい。

「へ、変態なんだ…」

「うん…。私のことを妹じゃなくて一人の女性としてみてるみたいで…」

「そっか…。お兄さんがいると男友達と呼べない理由が分かったよ…」

そして日曜日がやってきた。

「さあ、上がって！」

「お、おじゃまします！」

遠慮がちに結坂家へと上がる佳。

「今日はお母さんもないから、家には私達だけだよ」

「え…えー！ 二人きり!？」

ブビィツと、佳の鼻から鮮血が噴き出した。こいつの思考回路は小学生じゃない。

「うわっ、大丈夫!!?」

「う…うん…大丈夫。それにしても、この状況（家に二人きり）をお兄さんが知ったらどうなっちゃうんだろうね…」

「そ、それは想像するとすぐく怖いけど…、入院中のお兄ちゃんにこの家の状況を知る術なんて無いだろうから、心配しなくてもいいと思うよ」

「そうだよね…！ お兄さんの隣のベッドに占い師でもない限り、ここに僕が来てることなんて分かりっこないよね！」

その頃、病室の兄介は：

「ほう、こうなっていたか…」

水晶玉で家の状況を全て把握していた。

「これで満足ですか？」

「ええ、ありがとうございます。隣のベッドにあなたのような占い師がいてくれて本当に助かりました」

兄介は包帯グルグル巻きの身体で決然と立ち上がった。

「やれやれ…この間自分の血で汚れたばかりだというのに、今日はガキの反り血か…」

拳をにぎりしめ、窓へと歩きだす兄介。

その時、美人ナースと噂され最近完全に調子に乗っている岡島さんが病室へと入ってきた。

「ちよつと結坂さん！ 何やってるんですか！ まだ立てる身体じゃ…」

「だが俺は立っている！！」

岡島さんの制止を振り切り、兄介は窓から勢いよく飛び降りた。

「ちよ、ここは二階ですよ！！」

すぐさま窓へ駆け寄り、下を覗く岡島さん。そんな彼女を、兄介は呆れた顔で見上げていた。

「いや、一階だけど…」

「あ…すみません、流れるについて…」

あんたポケ側だったのか。

「じゃあ、俺は行くぜ」

「いや、ちよちよちよ…駄目ですってば！ 結坂さん、カムバ―
ーック！！」

「いや、まだ一步も動いてないんだけど…」

「あ…すみません、流れるについ…」

あんたボケ側だったんだな。

妹奈と佳は暗いリビングで手作りクッキーを食べながらホラー映画を鑑賞していた。

「こ…これ、お兄ちゃんが入院する前に借りてきたDVDなんだけど…予想以上に怖いね…」

「そそそそそうだね！ ででででもこれくらいなら大丈夫だよ僕！」

明らかに怖がっている佳。それでも妹奈は「佳君は強いね」と褒めてあげる。

（やった！ これで結坂さんの僕に対する評価がアップ！）
単純な奴である。

「クッククク…強い、か。チワワの如く震えておる貴様には相応しくない褒め言葉よのう」

突然、リビングのドアの方から不気味な声が発せられた。

「だ…誰!？」

妹奈が声を上げる。するとそれが合図となったかのようにドアが開かれた。

薄暗い部屋に、何者かが入ってくる。

「ミ…ミミ…ミイラ男だァ!!」

佳が叫んだ。

言うまでもなく部屋に入ってきた者の正体は病院から脱走してきた兄介だ。恐らく部屋が暗くて相手がよく見えないのと、直前までホラー映画を観ていたことが相俟って、佳の目には兄介が体中に包帯を巻いた化け物に映ってしまったのだろう。

(ん…、あれってまさか…)

妹奈は佳とは違い、ミイラ男を冷静な顔で見据えている。正体に気付いたか。

(はっ…! 結坂さんが恐怖で固まっている! …そうだ、ここ
で男を見せなきゃいつ見せるって言うんだ!)

なんか勘違いしてる佳。彼は妹奈の前に立つと、華麗に構えた。

「ほう、いい構えだ。しかし…!」

兄介は腕を前へ突き出した。すると、先がロールになっている包帯が飛んでゆき、佳の首に巻き付いた。

>i26164—210<

「ぐうえおううう…!!」

「フハハハハ! 苦しめ苦しめ!! そして死ねえええ!!」

兄介は佳を殺る気である。

「お兄ちゃん、やめて!」

見兼ねた妹奈が兄介を止めようと動きだした。

しかし…

「キャッ!!」

妹奈の体も包帯で縛られてしまう。

「まあ待て、お前はこいつを始末した後でじっくりお仕置きしてやる…:ゲヘヘ!」

顔に絶望の色を浮かべる妹奈。

(もう駄目だ…お兄ちゃん完全にキレちゃってる…)

妹奈が諦めかけたその時、最強の助っ人が駆け付けてくれた。

「貴様、動くな！」

兄介の背後で拳銃を構える警官。パトロール中にこの家の騒ぎが聞こえてきたのだろう。

「チッ、国家の犬か…！」

「なっ…私はそれを言われるのが一番嫌なんだ！ だから逮捕する！」

「私情で！？」

兄介、タイーホ。

事件は無事解決した。

「まさか、あの包帯グルグル巻きの人がお兄さんだったなんて…」
全てを知り、啞然とする佳。

「ごめんね、佳君…。あんなお兄ちゃんです…」

「え、いや、結坂さんが謝ることじゃないよ！ 僕は全然気にしてないよ！」

「ほんと？ じゃあまたうちに来てくれる？」

「え…？」

佳の体が小刻みに震えだす。双眸からは涙が滝のように溢れ出る。

「も…ももも…もちろんだよ…うわあああん…！」

「ダメじゃん…！」

妹 男友達を招く（後書き）

冷静に考えたら、前回あれだけ占いを否定していた兄介が、占いで自宅の状況を確認していただなんておかしい気がします…；

だからこうしましょう、

雑誌の占いは信じないけど占い師の占いは信じる、それが兄介！

究極の納豆！（前書き）

> i 3 2 7 3 — 2 1 0 <

参考文献『魯山人味道』

究極の納豆！

カーテンの隙間から朝日が差し込み、ベッドで眠る妹奈の閉ざされた瞳を通過する。

「う……ん……」

瞼を数回ぴくつかせると、妹奈はゆっくりと目を開き、「ん……しよ！」と声を出しながら身体を起こした。規則正しい生活を送っているためだろう、彼女はとても寝起きがいい。

妹奈は寝巻を脱ぎ、昨日のうちに用意しておいた服に着替え始めた。

「お兄ちゃんが起きる前にさっさと学校に行かなきゃ。朝、お兄ちゃんと遭遇するかしらないかは、一日のテンションに関わる重要な問題だからね」

そのための早寝早起きだったのか。兄介が聞いたら手首切るぞ。着替えを終えた妹奈は階段を下りると、トイレでたっぷり放尿してから（言わんでいい）、洗面所で歯を磨き、台所へと向かった。

「お母さん、おはよう」

「おはよう、妹奈」

母と挨拶を交わし、冷蔵庫の戸を開ける妹奈。

（朝はやっぱりこれだよね♪）

そんな事を思いつつ彼女が取り出した物、それは発泡スチロールの容器に入った納豆だった。

「妹奈は本当に納豆が好きねえ！」

「うん、プリンの次の次の次の次くらいに好き」

「微妙な順位ね」

パートへ行く準備をするためだろうか、母は妹奈の頭を数回撫でると、台所から出て行った。

「よし、混ぜるぞー！」

妹奈はタレと辛子少量を納豆にかけると、箸でぐちゃぐちゃ掻き

混ぜ始めた。

「ズズ…」

「ん？」

不意に、何かを啜るような音が聞こえた。妹奈は納豆を混ぜる手を止め、恐る恐る音のした方…背後へと目を向ける。

「お…お兄ちゃん…何で…」

「相変わらずあの人（母さん）の作る味噌汁は濃いわねえ…。私を殺す気かい？」

妹奈の後ろには兄介が立っており、母の作った朝食用の味噌汁に姑の口調で文句をつけていた。

「妹奈、グッモーニン！」

片手を上げて、兄介が妹奈に挨拶をする。

「おはよう…。お兄ちゃん、今朝はやけに早起きだね…」

「早起きっていうか、そもそも寝てないんだ」

「えっ、どうして？」

「尿管結石が死ぬほど痛くて…」

泣きながら股間に優しく手を当てる兄介。

「ちょ、病院…！」

「行くよ、後で…。それよりも今はもっと大切な事がある…！」

兄介は妹奈の手から納豆を取り上げた。

「何するの！？ 返してよ納豆…！」

「まさかお前が納豆好きだったとはな…今まで気付かなかったよ」

「まあ納豆は朝しか食べないし…朝はいつもお兄ちゃん寝てるし…って、何やってるの？」

妹奈が混ぜた納豆を、険しい表情で見つめる兄介。

「…ふむ、やはりな。愚かなる妹よ、お前は納豆の真の旨味を引き出せていない」

「えっ!？」

「お前が望むのなら教授してるぞ？ 納豆を美味しく混ぜる方法を」

「お：教えて！ 何でもするから！」

「ただ納豆好きやねん。」

「何でも…？ じゃあ裸の写真を…」

「そういうの以外！」

「えー！ じゃあ語尾に『スペルマ』ってつけて」

「え？ 何それ…」

「ほら、つけなきゃ！」

「わ、分かったスペルマ！ だから早く混ぜ方を教えてスペルマ！」

「ぬふふ…いいねえ（我が主、シスコエル（シスコンの神）よ…
…、何も知らない妹に卑猥な言葉を何度も吐かせる私は…アホな
のでしょうか？）」

「お前がアホじゃなかったらこの世にゃ天才しかない。」

「お兄ちゃん、早くスペルマ！」

「あ、ああ。確か床下に貰い物の…」

「兄介は床下収納庫から藁の束を取り出した。」

「あったあった。やはり納豆は藁わらづと苞に限るな」

「言いながら兄介は藁を広げた。」

「凄い！ 藁に入った納豆なんて初めて見た！」

「藁の中の納豆に興奮する妹奈。そんな彼女に兄介が厳しい視線を送る。」

「え…？ あっ！ 初めて見たスペルマ…」

「面倒臭いな。」

「次に兄介は戸棚から木箱を出してきた。」

「今度は何スペルマ？」

「向附。むかいづけ超有名な陶芸家、『激真龍轟雷』が焼いた器だ。これも
貰い物だったかな」

「わあ、凄い！」

「妹奈は箱から取り出された深い器を手にとると、色々な角度から眺め始めた。」

「確かにいい器だよスペルマ……。有名な陶芸家さんが焼いただけの事は……。あれ？」

器の裏を見た瞬間、妹奈の動きが停止した。

（『田中』と書いてある……！）

「どうした妹奈？」

「いや、何でもないよスペルマ……（作った人、轟雷さんじゃないじゃん！ 田中さんじゃん！ 一気に親近感沸いたよ！）」

兄介が勘違いしている理由を知りたい。

「さ、始めるぞ！」

器の中に納豆をぶち込む兄介。

「さあ混ぜるのだ妹よ！ 激しく大胆に、かつ、激しく大胆に、かつ、激しく大胆に……！」

『かつかつ』うるせえ。

「あの、まず醤油とか入れるんじゃ……」

「ぶわああっかもおおん……！」

「えっ……！」

「先にそんなもんかけたら水分過多で粘りが出なくなるだろおお……！ 旨味成分であるグルタミン酸が出なくなっちゃうだろおおえあ……！」

「何それ……？」

「語尾いい……！」

「ス、スペルマ……！」

「よし！ 説明してやるから混ぜながら聞け……！」

「は、はいスペルマ！」

妹奈は必死に納豆を混ぜ始めた。

「いいか！ 納豆の粘り……！ あれはアミノ酸の一種であるムチンとポリグルタミン酸が元となっている……！ ポリグルタミン酸ってのは納豆菌が大豆のタンパク質と糖質から作った、グルタミン酸とアミノ酸が繋がった状態を言うのだ……！」

「よ、よく分かんないよスペルマ……」

「考えるんじゃねええ!!! 感じるんだゴルアア!!!!」

「ひいっ!!! 今日のお兄ちゃん怖いよ!!! スペルマ!!!」

涙ぐむ妹奈。

「はい、手を止めない!!! 納豆に関しては兄ちゃん厳しいぞ!

」

あんた納豆の何なのさ?

「んで、そのポリグルタミン酸ってのは約三千個も繋がっている!!! あの高い粘りを生み出してるのはその繋がりがなわけ!!!」

「そ、そうだったんだスペルマ!!!。納豆が糸を引くのはポリグルタミン酸同士が繋がってるからなんだスペルマ!!!」

「そう!!!。そしてポリグルタミン酸は粘りのある状態じゃ美味くない!!!。糸を切る事で旨味が増すのだ!!!。糸を切って切って切りまくり、ポリグルタミン酸をグルタミン酸に変えてやるのだよ!!!。グルタミン酸が多けりゃ多い程ほど納豆は美味くなるのさ!!!」

「そ、そっか! 納豆を混ぜるのはそのグルタミン酸を増やすためスペルマ!!!」

「イエース!!!」

「あっ、ところでお兄ちゃん! 結石は大丈夫スペルマ?」

「ペイイイン!!!」

我慢してたらしい。

「あ...れ...:...なんだか...:...固くなってきたスペルマ!!!」

納豆を混ぜる妹奈の腕が、スローペースになってきた。

「おっ、糸が切れてきたな! よし、少し醤油を投入するぞ!

これで負担も軽くなるはずだああ!!!」

兄介はボトルに入った醤油を数滴納豆にたらしてやった。

「本当だ! 混ぜやすくなったよスペルマ!!!」

混ぜる、醤油、混ぜる、醤油。二人はこの流れをあと数回繰り返した。

「よし、そろそろいいだろ!!! ネギ投入!!!」

器に刻んだネギが放り込まれる！

「辛子投入！！」

器に辛子がたらされる！

「砂糖も入れるか！？」

「うん、お願いしまスペルマ！！」

砂糖も投下！

「よっしゃ完成！！　あとはこいつをホカホカご飯にの・せ・て
…」

お椀に盛られたご飯に、混ぜたての納豆が覆いかぶさる。

「出来た！！　これぞ究極の…いや、神の納豆！！　さあ妹よ、
食してみるがよいさ！！」

「い、いただきますペルマ！！」

兄介に言われ、納豆ご飯をかきこむ妹奈。

「お…美味しい…」

妹奈の瞳から涙が溢れる。

（これが…これが納豆の……本当の美味しさ……！　ああ…止
まらない……もう止まらないよ……！　舌が…細胞が…本能が…求
めてる……求めてる！！）

よっぽど美味だったのだろう、妹奈は速攻で納豆ご飯を完食した。

「ごちそうさまでしたスペルマ！」

「美味しかったろ？」

「うん、最高に美味しかったスペルマ！　お兄ちゃんは私にこの
味を教えたかったんだねスペルマ！？　だからあんなに熱く…。本
当にありがとうスペルマ！」

「そうかそうか、それはよかった！　いや、それにしても納豆
のどこがおいしいんだかね！」

「えっ…？」

「俺は納豆なんてクソまずいもんじゃなく、シーのチキンを食べ
るぞ」

言いながら、兄介はツナ缶のフタを開け始めた。その光景を妹奈

は唾然とした顔で見つめる。

「ハハ：そうだよね、美味しいよね、シーチキン……」
妹奈は兄介の胸倉を掴んだ。

「納豆食えよ！！！」

> i 3 2 7 2 — 2 1 0 <

究極の納豆！（後書き）

【その後の出来事】

妹奈

「ハア…ハア……（シーチキンを食べる兄介に対して）ちょっと興奮しすぎたスペルマ……うわ…手が納豆でベトベト……糸引いてるスペルマ………」

兄介

「あつ、やばい…股間が悪化してきた……」

母

「ま、妹奈！ 何なのその手は！？ 兄介は何でそんなところ押さえてんのよ！？」

妹奈

「え…これは…納豆の……」

兄介

「尿結石が…」

母

「そんな息荒げて、手えベトベトにして、スペルマスペルマってええ！！ 兄介は兄介でそんな所でへばっちゃって！！ さぞかしたくさん抜けたんでしょね！！ ああ、いやらしい！！ いやらしいわ！！ お母さんは出ていきますー！！」

妹奈

「ちよっ、待ってよお母さん！ 何で！？ どうみても納豆なのに！！」

兄介

「なあ妹奈…」

妹奈

「こんな時に何、お兄ちゃん！？」

兄介

「いや、あの母絶対わざとやってると思うんだが……毎度毎度……」

妹奈

「うっ…そうかも…」

母が一番、面倒なキャラですね！

霞むロミオとジュリエット（前書き）

登場人物紹介

> i 3 1 2 7 2 — 2 1 0 <

【真田流歩】

全国模試のトップクラスであったにも関わらず、あえてしょぼい大学を選んだ大学生。

真面目で曲がったことが嫌い。だが自分も十分歪んでいる。

霞むロミオとジュリエット

「つまり動いているのは時ではなく対象物であり、これは一般相対性理論と呼ばれ…」

只今、大学の講義中。時空の継続性だとかなんとか書かれたホワイトボードの横で、教授がマイク片手に小難しい理論を展開している。

そんな中、

「あ、見て、真田君が来てる」

「本当だ。今日も超カッコイイじゃん」

女子学生二人が左斜め前の席でノートを取る、整った顔立ちの男子学生を見つけてはしゃいでいた。

「すっごく頭良くて、T大合格間違い無しとまで言われてたんだよね。それなのに何でこんなレベルの低い大学に入っちゃったんだろう」

「それなんだけども、聞いた話によると、どうも好きな人を追っかけてこの大学に入ったらしいのよ…」

「え、真田君にそんなにも好きな人が…！ ショックかも…」

残念がる女子学生達。

その時だった。

「ハア…ハア…ハア…」

女子学生達の前の席から怪しい息遣いが聞こえてきた。

「…しまった、こいつの真後ろだとは思わなかった…」

前の席に座る男——兄介の存在に気付いた女達は、顔に落胆を浮かべた。

「結坂君：また妹さんの写真見て興奮してるんだ：」

「こいつ、講義中いっつもハアハア言ってるキモいんだよね」

「ちょ、声大きいよ：」

「いいじゃん聞こえたって。少しはおとなしくなるかもよ」

兄介は明るい性格で慕われやすいのだが、基本的には気持ち悪い
ため一部の女子から露骨に嫌がられていた。「あ、この人カッコイ
イ」なんてノリで兄介の隣の席についた女の子が、彼の息遣いに恐
怖して泣きだしたこともある。

「おい、結坂：」

ふと、真田が隣に座る兄介の肩に手を置いた。

「あ、真田君が結坂君に話しかけてる」

「さすが真田君ね。変態野郎に注意するつもりなんだわ」

感心する女子学生達。だが真田の口から出た言葉は注意ではなく、
質問だった。

「その写真の子供は誰だ？」

突然の問い掛けに、兄介は怪訝の表情を浮かべた。

「ま、まさかお前、こいつを狙ってるのか？ 妹に手は出させん
ぞメガネ！」

言い忘れていたが真田はメガネをかけている。

「手など出さん。そうか、その子は結坂の妹か」

「ああ、超可愛い妹さ。羨ましいだろ？」

「一応、俺にも妹はいる」

「そうなのか？ ま、でも絶対俺の妹の方が可愛いな！ 見ろよ
これ、天使じゃん！」

兄介は真田の顔に写真をグリグリ押し付けた。

「うあゝ、結坂君が真田君の顔に写真をグリグリとおお」

「変態野郎、調子に乗りやがって…。真田君、殴って。そんな奴殴って」

女子学生達が小声で叫ぶ。

「結坂よ…」

真田は兄介の手首を掴み、顔から写真を遠ざけた。

「お前まさか、シスターコンプレックスというやつか？」

「いかにも、俺はシスコンだ！ 妹にエターナルなラヴを誓った！ もう一生あいつしか愛さないし、愛せない！」

「ふむ…」

真田は瞳を閉じ、深呼吸をした。そして兄介の肩を強く掴む。

「イテテ、何だよ…？」

「結坂、この講義が終わったら屋上へ来い」

「屋上？ なにゆえ？」

「いいから来い。必ずだ」

兄介は「しょうがねえな」と了承した。

「真田君が結坂君を屋上に呼び出した…」

「講義を妨害する変態野郎に制裁を加える気なのよ。さすが真田君、正義感が強いわ」

講義が終わると、真田はすぐに屋上へ移動した。
フェンスの前で青空を仰ぎ、兄介を待つ。

（まさかあいつがシスターコンプレックスだとは思わなかったな。
ただでさえ障害が大きいというのに、これではあまりにもベクトルがズレ過ぎている）

背後から足音が聞こえてきた。

真田は「だが逃げ出すわけにはいかない」と言いながら足音のする方へ体を反転させた。

「よう、一体何なんだ？　こんな所に呼び出して」

兄介が真田の元へ歩み寄る。

「実は結坂に話が…」

「ところでお前誰だっけ？　やけに馴れ馴れしく話し掛けてきたけど」

「なに…？　結坂、俺を覚えてないのか？　高二の時同じクラス

だった真田流歩だ」

「あ…ああ！」

「思い出したか」

「あの『ムーンサルトウンコ事件』を起こした奴だろ？」

「それは小嶋だ」

「じゃあ知らんな」

「何だと…？」

「高二の記憶は小嶋に全部持っていかれちゃったんだよ」

「いや、確かにあれはインパクトあったが…」

「あ、もうこんな時間じゃねえか！　悪いけど帰るぞ。妹と約束してるんだ」

「なっ…、ちょっと待て結坂！　おい！」

兄介は帰ってしまった。

「結坂…。まあいい、これからじっくりと関係を深めていってやる。お前への告白はそれからだ」

ホモでした。

霞むロミオとジュリエット（後書き）

妹奈

「お兄ちゃんは学校でも変な人なんだね…」

兄介

「体裁を気にするようなシスコンはシスコンにあらず…」

妹奈

「うん、全然かっこよくないよ」

恐怖、賽の河原！【前編】（前書き）

私の書いた話には何のメッセージ性も無いが、読んだ方をほんの少しニヤつかせることならできるかもしれない。

「人生は楽しむためにある」

そう思っている私にとっては、それだけで十分だ。

有限である生において、笑いというものはたとえ一瞬でもダイヤモンド以上の価値がある…

兄介

「それはそうとアクセス数がたったの6なんだが」

ぎゃあああ！！　言わんといてえええ！！

恐怖、賽の河原！【前編】

夏休み初日。

自由研究で水に棲息する生き物を調べることにした妹奈は、兄介に付き添われながら、近所の川へと向かっていた。

「妹よ、川という危険な場所に保護者^{オレ}を連れていくというお前の判断はベリーベリーナイスだ。だがな…」

兄介は後ろを振り返り、ビシッと指を差した。

>i27138<ruby><rb>210<

「何故</rb><rp>(</rp><rt>なにゆえ</rt><rp></rp>>こいつまで連れていく！
！」

いきなり指を差され、「ひい！」と後退りするウニ頭の少年、佳。実は彼も同行していたのだ。

妹奈は庇うように佳の前に立ち、兄介を見上げた。

「佳君を恐がらせないで！ 別にいいでしょ、友達を誘ったって！」

「お前なあ、『ひい！』とか叫ぶヘタレを友達にすんなよ！」

「『ひい！』って言うからってヘタレとは限らないじゃん！」

「ヘタレに決まってるんだろ！ 『明智光秀』と言えば『敵は本能寺にあり！』、『徳川家康』と言えば『てゝ天ぷら食いてえ！』、

『ヘタレ』と言えば『ひい！』、世の常識だろーが！！」

「もう、適当なことばかり言わないで！！ 『徳川家康』と言え

ば『てゝ天ぷら食いてえ！』って意味分かんないし！ 例えの方が説得力無いなんてどういうこと！？ もう、お兄ちゃんと話してる
とほんと疲れる！！」

それを聞いた兄介は一気に表情を暗くする。

>i27139—210<

「はあ…もういい。本当はお前、俺とは行きたくなかったんだろ

…？ 俺と二人じゃクツソつまんねえから友達を呼んだんだよな…」

「そ、そんなこと言ってないでしょ！ 被害妄想強過ぎだよ！」

「被害妄想…か、なんとも便利な言葉よのう…」

「いい加減にしないと怒るよ！」

>i27140—210<

喧嘩を始める兄妹。

「あの…二人共…、このままじゃ話が進まないのだから早く川へ…」

佳がオロオロしながら二人を宥める。彼はさりげなく話の流れを気にしてくれていたのだ。偉い！

三人は河川敷へ到着した。

…そして、落胆する。

「あゝ、こりゃ駄目だな、水位が高いし流れも早過ぎる。そういや昨日の夜、雨が降ったんだよな…」

残念ながら今日は川のコンディションが最悪だった。

「こんな状態じゃ危なくて川に近づけないね…」

悔しそうに溜息をつく妹奈。

>i27141—210<

その様子を見ていた佳が、「また明日来ようよ。まだ夏休みも始まったばかりだし、焦ることはないよ」と励ますと、妹奈はすぐに笑顔を取り戻し「ありがとう、佳君！」と御礼を口にした。

妹奈の笑顔と御礼の言葉に興奮したのか、佳の鼻から鮮血が噴き出し、兄介の服に飛び散る。

「色んな理由で殺す」

「ヒィィ！！」

兄介が佳の胸倉を掴む。
その時だった…

「にゃ〜！ にゃ〜！」

猫の鳴き声が聞こえる。

三人は辺りを見回した。

「あ、あそこ！」

妹奈が指差した先、そこには体が半分川に浸かってしまっている子猫の姿があった。土手から伸びた草に掴まり、必死に流されまいとしている。

> i 2 7 1 4 2 — 2 1 0 <

「助けなきゃ！」

子猫に駆け寄る妹奈。

「お、おい！ 危ねえぞ！！！」

兄介と佳が後を追う。

「さ、もう大丈夫だよ」

妹奈は優しく子猫を抱き上げた。そしてすぐにその場を離れようとする。

…が、しかし、ぬかるんだ地面が彼女の足を滑らせてしまう。

「キャッ！」

水しぶきを上げ、妹奈が川の中へと消える。

「妹奈！！！」

「結坂さああん！！！」

佳はすぐさま妹奈が沈んだポイントに手を突っ込んだ。

「いや、そこじゃない！」

川の流れる方向に走りだす兄介。「あ、そうか！」と佳も後に続く。

十メートル程走った所で、二人の真横の水面から妹奈の腕が突き出された。続いて顔も上がってくる。

「ぶはっ！　ゴボッ！　ゴボボ！！」

苦しそうな妹奈。息をしようとするたび、水が口の中に入ってしまう。

「結坂さん！　僕の手に！！」

佳は走りながら中腰になり、妹奈に手を差し出した。

「しくじるなよ！！」

「分かってます！　あっ…」

佳も落ちた。

>i27143—210<

「うおおおい！！　なあああにやっとなんじゃあああ！！」

兄介は慌てて手を伸ばすが、届かない。妹奈と佳は斜めに、土手から離れるように流れされているのだ。

「やべえ…やべえ！！」

兄介の顔に絶望が浮かぶ。

「…………俺一人が生き残るなんてあってはならんことだ。三人で助かるか、三人で死ぬか…！」

川に飛び込む兄介。流れに身を任せつつ、妹奈達の元へ近づいていく。

（意外と泳げるぞ！　これなら…！）

兄介はまず佳の元にたどり着いた。すると佳がいきなりしがみついていたので、兄介はわざと水中に沈んで彼を体から引き離れた。

水面に上がり、佳を背後から抱える。

（まず一人！！）

兄介は右腕で佳を抱えたまま、左手で必死に水をかいた。

そして今にも沈みそうな妹奈の元へたどり着く。

（よし、妹奈もゲッツ！）

右腕に佳、左腕に妹奈。非常に無理のある状態だが、兄介はなんとか流れに乗っている。

(……で、これからどうしたらいい!?)

彼はこの後のことを考えていなかったようだ。

(どこかに掴まろうにも、両腕が塞がっている……)

打つ手無しかに思われたその時、救世主が現れた。

「あんた達、大丈夫うう!!? 今救助の人呼んだからねええ!!」

おばさんだ。凄いスピードで自転車を走らせているメタボリックお婆さんが、土手から兄介達に向かって叫んでいる。なんとなく、ダイエットを兼ねているように見えなくもない。

(うおおお! サンキュー、お婆さん! 俺達を死亡という結末から逃しつつ自分自身も脂肪から逃れるというダブルプレー!!) 歓喜する兄介。だがその直後……

「うお!! 両手両足つつたああ!!」

なんたる不運。

兄介達の身体が川に飲まれていく。

(ちくしょう、これで終わりなのかよ……。せめて……こいつらだけでも……助けたかった……)

彼らの運命は……!?

恐怖、賽の河原！【前編】（後書き）

佳

「今回は一話で完結しないんですね」

兄介

「そのようだ。お前ラッキーだな、こういうタイミングで登場するなんて」

佳

「いえ、そろそろこういう話がくるんじゃないかと思って…」

兄介

「狙ってやがったのか…！？ ある意味、お前みたいなキャラが一番恐ろしい」

恐怖、賽の河原！【中編】（前書き）

> i 2 7 3 2 9 — 2 1 0 <

妹奈

「後編書いてる時に文字数がオーバーしちゃったから急遽中編を追加したんだって！ 作者さん、計画性無いよね！ だから人生おかしくなっちゃったんだよね☆」

恐怖、賽の河原！【中編】

兄介、妹奈、佳は、薄暗い河原に立っていた。

「え、あれ…？ 僕達、溺れてたんじゃ…」

佳が不思議そうに辺りを見回す。

「お兄ちゃんが助けてくれたんでしょ？ 腕で抱えてくれたこと、

うつすらとだけど覚えてるよ」

言いながら笑顔で兄介を見上げる妹奈。

だが兄介から返ってきた言葉は意外なものだった。

「…いや、俺はお前達を助けられなかった…」

「「え？」」妹奈と佳の顔に困惑が浮かぶ。

「お兄ちゃん…何言ってるの…？ じゃあどうして私達は…」

「分かんねえよ…。っていうかちよつと待て…、ここ俺達のいた川じゃないぞ…！」

川の前にしゃがみ、深さを確かめたり、石を調べたりする兄介。

確かに、ここは三人が落ちた川とは全く様子が違う。

「ま、まさか…。遠くまで流されたからそう感じるんじゃないですか？」

「それはない…。俺達が落ちた川は、あの早い流れのまま海に直行してたはずだ。途中にこんな落ち着いた場所があるなんて思えない…」

「言われてみれば…。ここってどう見ても私達のいた所より上流だよね…。田舎の川って感じがする」

もうわけが分からない。三人はただおどおどするしかなかった。

>i27331—210<

> i 2 7 3 3 2 — 2 1 0 <
> i 2 7 5 3 4 — 2 1 0 <

「うう……お父さん……お母さん………」

どこからか泣き声が聞こえてきた。

声の主を見つけたのか、妹奈が「あそこ…」と下流の方を指差す。

「子供…か？ あんな所で何やってんだ？」

「石を積んでるみたいだよ…」

妹奈や佳と同じ年くらいの少年が、啜り泣きながら河原の石を積み上げている。

「あ…！ 見てください、彼の向こう側にもたくさん人が…！！

ああ…！ 上流の方にもあんなに…！」

暗さに目が慣れてきたためだろう、『川沿いに一定の間隔で何人もの子供達が石積みをしている』という、この河原の異常な状況に三人は気付いた。

「子供…石積み…、そうか…そういうことか……！！ ここは賽の河原だ…！」

「え、何それ？」

兄介の発言に妹奈と佳が首を傾げる。

「親より先に死んだ子供が来るっつー河原だ。ここに来た子供は親を悲しませた罰として、石を積んで塔を作らにゃならんらしい…」

「ちょ、ちょっと待ってよお兄ちゃん！ 今、『親より先に死んだ子供が来る』……そう言ったの？」

その問いに対し、兄介は『しまった』という顔をした。そして躊躇いながら、頷く。

「そ…そんな…僕達…死んじやったんだ…」
へたりこむ佳。

「う…うう…うわああん！！ 私のせいだ！！ 私が川に落ちたから！！ ごめんなさい！！ 二人共、本当にごめんなさい！！」
大泣きする妹奈。

「十九歳の俺でも死んだら賽の河原へ行くんだな…。二十歳を過ぎてたら来なくても良かったんだろうか。まあ磯野時空であるこの作品で二十歳を迎えることなんて永久にないんだけども」
いらんことを考える兄介。

「グハハハハ！ よく来たな新入り共！！」

突然、背後からでかい声が発せられた。

振り向いた三人は一樣に驚きの声を上げる。

「お…おお…鬼だアア！！！！」

>i27334—210<

赤い皮膚、パンチパーマから飛び出た二本の角、街中を歩けばタイーホ間違いないしの『こしみの』ファッション。そう、目の前にいるのはどう見ても鬼であった。

「出たか…！ 子供の努力を邪魔する鬼め！」

「ほう、知ってるのか？」

「知ってるさ。この鬼共は石の塔が完成しそうになると、ブツ壊して台なしにしちまうんだろ？ いい趣味してるよなあ」

「ふん、ダラダラ積んでる奴が悪いんだ。さあ、お前達もさつさと石を積み！ ここから解放されたければな」

鬼はニヤリといやらしい笑みを浮かべた。

「…………二人共、石を積むぞ。泣きたいのは分かる、俺だってそうさ…」

泣き止まない妹奈と佳の背中を優しく押し、兄介は石を積むよう促した。

三人はそれぞれ離れた場所で石積みを始めた。

「うっ…うっ……ごめんね…お母さん、お父さん…。私ここでしっかり罰を受けるから…」

真面目な妹奈は自分の運命を受け入れ、反省を口にしながら石を重ねる。

「うう…二回目の登場で死んじゃうなんて……」

佳は物語における自分の扱われ方を嘆きながら、積みやすそうな石を一カ所に集めていた。

「さて、どんな塔を造ってやろうか。あの鬼の度肝を抜いてやるぜ」

こんな状況だというのに何故か気合い満々の兄介は、石をどのようにに積むかイメージを膨らませている。っていうか、切り替えが早過ぎて恐い。

石を積み始めて、一時間が経過した。

「よし…、いい感じ、いい感じ」

妹奈はずいぶん高くまで石を積み上げていた。なかなか上手くバランスが取れている。

だが…

「そらよ!」

> i 2 7 3 3 5 — 2 1 0 <

鬼が積み上がった石を蹴飛ばし、崩してしまった。

「酷い…!　せっかく積んだのに…」

恨めしげに鬼を見上げる妹奈。

鬼はそんな彼女を一笑し、佳の方へ目を向けた。

> i 2 7 3 3 6 — 2 1 0 <

「ふん、あっちのガキは問題外だな、不器用にもほどがある」

佳は最初に積みやすそうな石を選別していたにもかかわらず、なかなか塔を高くできずにいた。妹奈と違い、バランスを取るのが下手なのだ。

「…さて、あいつはどこまで積み上げたかな?」

鬼は兄介の方へ首を向けた。

> i 2 7 3 3 7 — 2 1 0 <

そして叫び声を上げる。

> i 2 7 3 3 8 — 2 1 0 <

「うわああああ!!!!」

兄介は河原の石で一平米程の大きな城を建設中だった。

「危ねえええ!!」

> i 2 7 3 3 9 — 2 1 0 <

鬼はすぐさま城を破壊する。

「うおい！ 何しやがる！！ 俺の力作を！！」

「ハア…ハア…、俺がいる限り、貴様らの努力は永遠に報われないんだよ！ 分かったか！」

「くそっ…」

悔しそうに膝をつく兄介。そんな彼に背を向け、鬼は他の子供達の元へ向かおうとする。

だが、なんとなく嫌な予感がしたのだろう。鬼はチラッと背後を振り返った。

「うわああああ！！！」

> i 2 7 3 4 0 — 2 1 0 <

また叫ぶ鬼。

兄介は「これなら毎日舐め回すように見てるから簡単だ」と言いながら河原の石で巨大な妹奈像を建造中だった。もはや積んで造るのは不可能な、重力など殆ど無視した構造である。

「摂理軽んじるな！！」

> i 2 7 3 4 1 — 2 1 0 <

鬼は妹奈像を豪快に破壊した。

「妹奈アア！！！」

壊された像に向かって兄介が叫ぶと、遠くの方で妹奈が「何？」と振り返った。

「貴様アア…！ 城だけでなく妹奈まで…！」

「グフフ、俺をここまで焦らせたのはお前が初めてだ。次も俺の予想を超えて見せろ！ そして俺を楽しませてくれ！！」

「うるせエエエ！！」

> i 2 7 3 4 2 — 2 1 0 <

「ぐふうえええ！！」

兄介は鬼の腹を殴り付けた。そして立ち上がり、辺りを見回す。

「お前ら何年も石なんか積んで馬鹿じゃねーの！！ 今こそ反逆の時だろオオオ！！」

河原の子供達を煽る兄介。完全にキレている。

「や：やはりお前は、俺の予想の斜め上をいく…。だが残念だったな…。このガキ共にそんな度肝はない！ あったとしても俺達鬼に敵うはずがない！」

鬼がそう言い切った時だった。

「そんなのやってみんと分かんべさ！！」

着物と草履を身につけた少年が歩いてきた。

「オラはこの時を待ってただ！ 数百年にも及ぶ石積みで鍛え上げたこの腕力、ついに試す時がきただよ！！」

> i 2 7 3 4 3 — 2 1 0 <

恐らく江戸時代くらいからここで石を積んでいたのだろう。少年の腕は丸太のように太くなっていた。

「ガキが！ 調子に乗るなよ！！」

鬼は少年に向かって拳を振り上げる。

だが：

「江戸パンチ！！」

「ガハッ！！？」

> i 2 7 3 4 4 — 2 1 0 <

逆に少年の鉄球のような拳を喰らい、鬼は二十メートル程吹っ飛ばされてしまった。

「バ：バカ……。な……。このガキが：これほど強くなっていたとは……」

鬼はこしみのから笛を取り出すと、それを吹きながら気を失った。

「チッ、仲間を呼びやがった！」

兄介はすぐさま子供達に戦闘準備をするよう促した。

「お兄ちゃん！！」

「お兄さん!!」

妹奈と佳が兄介の元に駆け寄る。

「お前達、戦えるか？」

「うん!」「はい!」

二人が力強く返事をした直後、敵の増援部隊が木々の間からぞろぞろ現れた。

「出たな鬼共!!　いくぞみんなああ!!!」

『身長二メートルを超える鬼軍団』VS『腕が丸太のように太い子供軍団』。

走りだす両軍。力と力が激突する…!

恐怖、賽の河原！【中編】（後書き）

時速80キロで走る4トントラックの衝突…。
江戸パンチにはそれくらいの威力がある。

兄介&妹奈&佳

「いやいやいやいや!!」

恐怖、賽の河原！【後編】（前書き）

漫画も小説も三流な人はどうしたらいいか…
答えは一つ、新ジャンルを作ればいい！

漫画と小説が互いを支えあう、それが…

『漫画小説』だァァァ！！

佳

「まんまですね」

恐怖、賽の河原！【後編】

鬼軍団と子供軍団の戦闘は熾烈を極めた。

一時間後…

「あらかた片付いたな」

腕が丸太の子供達は予想以上に強く、その怪物じみた腕力で鬼達を一掃してしまった。

これまで積み上げた石を何度も崩されてきた彼らだが、その努力は決して無駄になってはいなかったのだ。

「む…向こうから何か来るぞー！！」

突然、一人の子供が声を上げた。それにより全員の視線が同じ方向へと向けられる。

「な…なんだよありゃあ…」

> i 2 7 3 4 5 — 2 1 0 <

森の木々を踏み倒しながら、山のように巨大な鬼が子供達の方へ向かってくる。

「ボスのお出ましか…」

「どうするの兄ちゃん!？」

「あ…あああ…あんなのどうしようもないですよ…!」

何人かの子供達がボス鬼に立ち向かうが、軽い足蹴りで吹っ飛ばされてしまっている。丸太の腕を以ってしても敵わないのだ。

「佳…」

ボス鬼を見上げたまま、兄介が佳の名を呼んだ。

「お前は妹奈が川に落ちた時、自分の危険を顧みずに助けようとしてくれたな」

「え…まあ…はい」

照れながら頭を掻く佳。

「…………妹を……頼んだぞ」

そう言って、兄介はボス鬼のいる方へ歩きだした。

「お兄ちゃん…まさか…………!! ダメエエエ!! 行かないでエエエ!!」

妹奈の悲痛な叫びを背に受けても、兄介の足は止まらない。

「野郎共オオ! ボス鬼は俺が食い止める! その間にとっとと石を積んで成仏しちまえ!!」

兄介は子供達にそう命令を下すと、足元にあったメロンくらいの

大きさの石を拾い上げ、ボス鬼に向かって駆け出した。

その姿を見た一人の子供が「隊長オオオオ!!」と泣き叫ぶ。すると別の子供が彼の肩に手を置き、「隊長の気持ちを無駄にするな!」と言って石を積むよう促した。

その様子を見ていた佳も、

「結坂さん：石を積もう：」

と、泣きじゃくる妹奈を説得する。

（お兄さん、結坂さんは僕が責任を持って成仏させてみせます…

！ あなたの犠牲を無駄にしたりはしません!）

佳は涙を流しながら、そう心に誓った。

しかし：

「石でスネ殴ったら勝てたアアア!!!」

兄介はボス鬼を倒した。

>i27429—210<

倒れたボス鬼の上で石を掲げる兄介。

「ウオオオオオオ!!」と子供達から歓声が沸き上がる。

「お、お兄ちゃん：普通に勝っちゃった：」

「お兄さんが化け物なのか、あの鬼のスネが異常なほどデリケートだったのか：」

妹奈と佳は呆然と立ち尽くした。

「無事帰還！」

ボス鬼を撃破した兄介が妹奈と佳の元へ戻ってきた。

すると妹奈が目潤ませながら「おかえり！」と兄介に抱きつく。その行為に驚いたのか、兄介は顔を真っ赤にしながら何故か十二支を言い始めた。この男、意外と相手から寄ってこられるのには弱いかもしれない。

「さ：さあ、早いところ石を積んじまおうぜ！　また鬼が来るかもしれないしな！」

兄介はその場で胡坐をかき、石を一つ手に取った。
と、その時：

『おい！　しっかりしろ！』

どこからか、声が聞こえてくる。

『頼む、息を吹き返してくれ！』

三人はキョロキョロと首を巡らすが、どこにも声の主らしき人物は見当たらない。

「あ！　佳君！　体が！！」

「え？　ちょ…、うわ！！」

突然、佳の体が薄くなり始めた。

「おい、妹奈！　お前も消えてってるぞ！」

妹奈の体も薄くなっている。

「何これ！　どうなっちゃうの！？」

「うわあああ！　消えちゃうよおおお！！」

瞬く間に、二人の姿は消えてしまった。

妹奈と佳は薄っすらと目を開いた。

二人はさぶ濡れの状態で仰向けになっていた。

「子供達の意識が戻ったぞ!!」

「担架で運べ!」

二人の周りには何人ものレスキュー隊員がいた。さらに、その後ろにはメタボリックおばさんをはじめとする野次馬が集まっている。

「あ…あの…私たちは……」

妹奈が弱々しく口を開いた。

すると目の前にいるレスキュー隊員のおじさんが「君達は溺れてたんだよ」と言った。

「溺れ…てた…」

「うん。でも大丈夫、おじさんが熱い人工呼吸で助けてあげたから。ゲヘヘ!」

>i27558—210<

「うえ…」

妹奈は胃液を吐いた。

「おい！ こっちも息を吹き返したぞ！」

その声に反応し、妹奈は首を横へ向ける。

「お兄ちゃん…！」

ずぶ濡れの兄介が口から水を吐いていた。彼も人工呼吸によって一命を取り留めたのだ。

（よかった…。ところでお兄ちゃんはどんな人に人口呼吸されたんだろう）

妹奈はチラッと視線をずらした。すると彼女の瞳に、超美形のレスキュー隊員が映る。

「うう…、あっちがよかったよう…：あっちがよかったよう…：」

すすり泣く妹奈。するとレスキュー隊員のおじさんが、「あっち！？ あっちって『あの世』のことがい！？ 駄目だよそんなこと言っちゃ！」と訳の分からん勘違いをしだした。

妹奈は一瞬だけ目を丸くすると、苦笑いをしながら「はい」と呟いた。

その後、兄介、妹奈、佳は、病院で検査を受け、保護者と共に家へ帰宅した。

数日後：

三人は妹奈の部屋に集まっていた。

「結局、妹奈の自由研究は『貯金箱製作』に変更か…」

「しょうがないよ…。あんなことがあったんだから、もうお母さんが川へ行くことなんて許してくれないよ」

妹奈はダンボールをハサミで切りながら溜息をついた。

「ところで…、あの賽の河原って何だったんでしょ。やっぱり夢だったんでしょか？」

佳が兄介に尋ねる。

「うーん…、三人が同じ場所の、それも内容がリンクした夢を見るとは思えない。俺達はきっと、臨死体験で本当にあの河原へ行ったんだ」

「臨死って…、生きてはいるけど死に近い状態のことだっけ？」

「そうそう。その状態だと死んだ人間と同じ体験をしちゃうらしいんだ。今回は救助隊のおかげで運良くこっちへ戻ってこられたけど、場合によっちゃあのまま…」

それを聞き、妹奈と佳は身震いした。

「…そうだ、河原の子供達はあれからどうなったんだろ？ みんな石を積み終えたかな」

「ああ、あいつらなら大丈夫だろ。邪魔する鬼はみんなやつちまったし、きっとあいつら成仏できたろうよ」

「そっか…、そうだよね！」

暗かった三人の顔に、少しだけ笑みが浮かんだ。

「あ！」

急に佳が声を上げた。

「何だよお前いきなり。漏らしたのか？」

「いや、その…、あの河原が夢じゃなかったとしたら、お兄さんが僕に言った『妹を頼んだぞ』という言葉も夢じゃなかったということになりますよね？」

一瞬、兄介の体が石のように固まる。

>i27559—210<

「そ、そんなこと言っとらんぞ俺は！ 河原で夢でも見たんだろ！」

「そんなあ…！ ごまかさないでくださいよ『お義兄さん』！」

「貴様アアア、もう一度あの河原へ送ってくれる…！」

襲い掛かる兄介。「ヒィィィ！」と逃げ回る佳。二人のやり取りを見て呆れる妹奈。

でもどことなく、三人は楽しそうだった。

恐怖、賽の河原！【後編】（後書き）

賽の河原には今、もの凄い数の子供がいます。

だからサーバーが何千万個も存在しているそうです。

兄妹達が訪れたのは第八百九十五万六千七百三十一サーバーだそうです。このサーバーの子供たちは今回の話で全員解放されました。

V S 蚊! (前書き)

兄介

「蚊なんてもんわなあ、家ごと焼き払っちゃまえばいいんだよオオオ
!!」

妹奈

「お、お兄ちゃん、キャラがおかしくなってるよ!!」

VS蚊!

深夜、兄介が自分の部屋のベッドで寝ていると、突然ドアが開き妹奈が入ってきた。

「え…あれ…妹奈!? ちょっと…夜這いかよ!!! こんなことなら勝負パンツ履いておくんだったアアア!!!」

「ち、違うよバカ!」

否定する妹奈。だがそれは裏目に出る。

「ツンデレ、キターー!!!」

都合の良い解釈をし、兄介は妹奈をベッドに引っ張り込んだ。

「ちよっと、やめてよお兄ちゃん!!! 怒るよ!!!」

「ウヒヤヒヤ! ツンデレツンデレ!!!」

「違うってば!」

妹奈は思い切り兄介の股間を蹴り飛ばした。

「ぬぐおう!!! そうか、やっぱりツンデレなのか!!!」

「うわああん! 何言ってもツンデレ扱いだよお!!! こうなっ

たら舌嚙んで死んでやるうう!!!」

「な、何!!! ちょっと待て、お前まさか本気で嫌がってたのか

…?」

「当たり前でしょ!!!」

兄介は溜息をつくと、ベッドから下りて椅子に座り、偉そうに腕と足をそれぞれ組んだ。

「さて、俺をガツカリさせた罰として今晚お前の肉体からだを好きにさせてもらおうか」

「結局かい!!!」

妹奈は兄介の部屋に来た理由を話し始めた。

「私、寝る時クーラーは使わず、網戸にするでしょ？　それで今日も網戸にして寝てただけど…」

袖をめくり、腕を出す妹奈。

「うわっ、どうしたんだそれ!？」

彼女の腕には数多のブツブツができていた。

「なんか網戸に穴が空いてて、そこからたくさん蚊が入ってきちゃったの…」

それを聞いた兄介がピクツと反応する。

(マズイ!　その穴空けたの俺だ!　この部屋の窓から投げたオーストラリアのお土産『アボリジニ・ブーメラン』が上手く戻ってこず、ここの隣に位置する妹奈の部屋の網戸を突き破ったんだった!!)

>i28198—210<

兄介は椅子で偉そうに座るのをやめ、床に正座した。

「何で正座したの？」

「え、いや…あれだよ、急にジャパニーズソウルに目覚めたんだ。椅子なんてもんは西洋かぶれが使うもんだろ」

「ふーん、でも『ジャパニーズソウル』って普通に英語だよね…。矛盾してない？」

「お、俺が目覚めたのは『日本的な座りかた』だけ!　言語とかそういう魂はまだ目覚めてないの!」

「ピンポイントに目覚めていくんだね…」

もうその男と真剣に取り合うのはやめた方がいいぞ妹奈よ。

「で、お前は俺にどうしてほしいんだ?　今夜はこの部屋を使わせてほしいのか?」

「うーん、最初はそのつもりだったけど、さっきの一件で恐くなっちゃった…」

そりゃそうだ。

「だからお兄ちゃん、私と一緒に蚊を退治してくれないかな…。
そうすれば自分の部屋で寝られるし」

「え、蚊の退治？ それなら蚊取りマツチョを置いときゃいいだ
ろ」

>i28199—210<

妹奈は静かに頭を振った。

「アレ、薬剤が切れちゃって使えないの…」

「あ、そうなんか…、ならしうがないな。よし、蚊の討伐に協
力しよう！」

「ありがとう！」

(網戸破ったの俺だしな…)

妹奈の部屋に入り、電気をつける。するとおびただしい数の蚊が
その姿をさらけ出した。

「うわ、こんなにいたんだ!!」

部屋を見渡し、妹奈は驚きの声を発する。

「妹奈、お前網戸にしたままじゃないか…。窓を閉めてから部屋
を出ないと…」

「あ、本当だ！ だからこんなに入ってきちゃったんだ！」

「意外と天然なんだよなあ、妹奈は」

「うゝ、刺された所があまりにも痒かったから、慌てて部屋を飛
び出しちゃったんだよ…」

そう言う妹奈は小走りで部屋を移動し、窓を閉めた。

「これでもう蚊は増えないよ！ さ、お兄ちゃん、始めようか！」

「おう!!」

「うらうらうら!!」

「えい! えい!」

兄介と妹奈は盆踊りのような動作で蚊をパンパンと叩き始めた。
ジェノサイドである。

だが蚊も黙ってやられてるわけではない。

「キャアアア!」

叫び声を上げる妹奈。「どうした!」と、すぐさま兄介が振り返る。

「助けてお兄ちゃん!」

「うおお!!」

妹奈は大量の蚊にたかられていた。

「妹奈ア、ちょっと我慢してろよ!」

兄介は妹奈を救うため、彼女の体についた蚊をパシパシ叩く。

…と、その時だった。

「な、何してるの!?!」

母が部屋に入ってきた。兄介が妹奈（の体についた蚊）を叩きまくるというこの状況に驚きを隠せないようである。

「…悲鳴が聞こえたから来てみれば…兄介！ まさかあんたが妹を虐待するなんて！！」

お得意の勘違いをぶっ放しながら、母は兄介の元へ近づいてゆく。
だが：

「あ、母さん、蚊！」

いきなり兄介に頬を平手打ちされてしまう。顔に蚊が止まっていたためだ。

そうとも知らず母は、「お、お、お、親にまで手をあげるなんて…！ 不本意だけど、もう警察に頼るしかないわ！！」と泣きながら部屋を飛び出していった。

「一体何しに来たんだ母さんは…。何かゴチャゴチャ言ってたけど、妹奈を助けるのに必死であまり聞いてなかった」

母親が去った後も兄介と妹奈は駆除を続け、いつしか蚊は残り一匹になっていた。

「お兄ちゃん！ 最後の一匹、凄いスピードだよ！」

「ああ！ 奴は俺に任せろ！！」

そう言って、兄介は背中からブルーメランを取り出す。

>i28202—210<

「喰ウウらえエエ!! この部屋の網戸を破壊した超兵器、アボ
リジニイイイ・ブウウウメラン!!!!」

「網戸壊したのあんたかい!!」
放たれたブーメランは部屋を飛び回る蚊を弾き飛ばし、そのまま
窓ガラスを突き破った。

「勝った…!」

満足げな表情を浮かべる兄介。だが妹奈は不満そうだ。

「お兄ちゃん、もう二度とこの家でそのブーメラン使わないで!
網戸だけじゃなく窓まで割っちゃって…」

>i28200—210<

「悪い悪い!　ところで妹奈…」

「何?」

兄介は「ハアハア」言いながら妹奈をベッドに押し倒した。

「ちよつと、やめてよお兄ちゃん!　何でいきなり…」

「いやあ、散々暴れ回ったせいか、今興奮しまくりでさあ!
だけにスイッチ(吸いっ血)が入っちゃったって感じ?」
蚊

「分かりにくいよ!」

>i28201—210<

「なあ、いいだろ!?　激しい夜にしようや!!」

兄介の手が妹奈の服に潜り込む。

その時だった…

「動くな!!」

数人の警官がズカズカと部屋に入ってきた。

兄介を妹奈から引き離し、床に押さえ付ける。

「兄介…ごめんね。あなたのためでもあるのよ…」

警官達の後ろでは母が涙を流していた。

「はあ…また警察か…。妹奈、すぐ戻るからな」

「しばらく戻ってこなくていいよ」

「そんな!!」

兄介、タイーホ!

VS蚊！（後書き）

兄介

「蚊^{モスキート}だけに、『もゝ好きゝ止』まらなゝい!!」

妹奈を強く抱きしめる兄介。

妹奈

「う、苦しいよお兄ちゃん…。無論、二つの意味で」

伏兵（前書き）

登場人物紹介

> i 3 0 9 5 7 — 2 1 0 <

【華歩】

妹奈の友達。

見た目は穏やかだが、裏がある。

伏兵

「お兄ちゃん、今日うちに友達が来るから」

リビングでくつろぐ兄介に、妹奈が声をかけた。

「友達：だとう？ まさかオスじゃないだろうな：ホモサピエンスのオスじゃないだろうなああ！！」

>i29897—210<

妹奈に鋭い視線を向ける兄介。

>i29898—210<

「メ：メスだよ！ ホモサピエンスの！」

「メスならOK！！」

兄介は身体の緊張を解き、再びリラックスし始めた。

佳は結坂家を目指し、熱い日差しの下を歩いていた。

「いきなり訪ねたら、結坂さん迷惑するかな。でもこの前『夏休みの宿題で解らない所があったらいつでもうちに来て！ ていうか佳君大好き、結婚して！』って愛らしい声で言ってくれたし、問題無いよね！」

少なくとも、記憶と妄想の区別がついてないお前の頭には問題がある。

そんなアホなことを言ってる内に、佳は結坂家の前までたどり着いた。

「ふう、やっと着いた……って、あれ？ 君は確か隣のクラスの……」

佳の前に一人の少女が現れた。斜めに流した前髪と眠そうな目、そしておしとやかな雰囲気特徴的だ。

>i30958—210<

「こんにちは。あなたも妹奈ちゃんに会いにきたの？」
子供らしくない落ち着いた口調で少女が尋ねる。

「あ、うん、ちよっと宿題を教えてもらおうと思って」

「アポは？」

「え？ アポは取ってないけど」

「あら、アポ無しでも会える関係なのね？」

「えへへ、まあね。結構仲良いんだ、僕達」

だらし無く笑う佳。

少女は「そう…」と呟くと一瞬にして佳の懷に潜り込んだ。

「えっ…!?!」

「邪魔者は…消す」

インターホンが鳴った。妹奈は玄関へ行き、扉を開けた。

「いらっしやい、華歩ちゃん。暑かったでしょ？」

「大丈夫よ、影から影へと移動してきたから」

「あはは、忍者みたい」

おしとやかな雰囲気少女——華歩は、「おじゃまします」と言いながら家へ上がった。

妹奈の部屋を目指し、二人は廊下を移動する。すると、ちょうどトイレから出てきた兄介と鉢合わせとなった。

アトミックボム

「ふはー、なんとか超大便の投下に成功したぜ!>i30905—210< だがあまりのデカさ故、肛門が裂けて血だらけとなっ

てしまった！＞i30906—210＜ 我が軍が払った犠牲は大きい！＞i30907—210＜

「ちょ…お兄ちゃん！ やめてよ恥ずかしい！ 友達が来てるんだよ！！」

「うおっ、いたのか妹奈！ お、そっちは友達か！ よしよし、男じゃないな！ 偉いぞ妹奈！」

そう言い残し、兄介はリビングへと入っていった。

「ごめんね、変なお兄ちゃんで…」

「ううん、面白いお兄さんだわ」

「そう言ってもらえると助かるよ。あ、そういえば華歩ちゃんにもお兄ちゃんがいるんだよね？」

「ええ。好きな人を追いかけて三流の大学に入った駄目な兄がいるわ」

「え、それ駄目かなあ。私は素敵だと思うよ、そういうの」

「妹奈ちゃんは本当に優しいのね」

言いながら華歩は妹奈の頬に顔を近づけた。妹奈は顔を朱に染めながら「さ、早く部屋に行こ！」と言って歩きだした。

「やっぱり女は女同士で遊ぶのが一番だよなあ。野郎と遊ぶんざ不健全極まりない」

リビングのソファで雑誌を読みながら、ぶつぶつ呟く兄介。そこに、予想外の客が現れる。

「お…お兄さん…、その考えは甘いですよ…」

兄介は「誰だ!」と、声のした方へ首を向けた。

「僕です…佳です…」

開かれるリビングのドア。その向こうには、満身創痍の佳がいた。

「か…佳! どうしたんだその体は!?! いや、それよりも何で人の家に勝手に入ってきてんだ!?!」

「えええ…質問の順番に愛がない…」

兄介は佳の傷の手当をし始めた。意外といい奴である。

「で、何があったんだよ?」

「実は…、この家の前で暴行を受けちゃって…」

「なにいい!?! 犯人はどんな奴だ?」

「犯人は…、今この家に遊びに来てる女の子です」

「は…? 何で妹奈の友達がお前に暴行すんだよ」

「…あの娘は、結坂さんを狙ってるようなんです…。だから結坂さんと仲の良い僕を排除しようとしたんだと思います」

「妹奈を…狙ってる…? それって…妹奈を恋愛対象として見るってことか?」

「ええ、恐らく…」

「な…ななな……なんてこった!! あいつはレズという名の伏兵だったってことか!?!」

兄介は深い溜息をつきながら、その場に崩れ落ちた。

「ああ、めんどくせえことになったぜ…。それにしてもよう、何でお前は女にやられてんだよ。それも一方的にさ」

「…いや、あの娘あ見えてむちゃくちゃ強いんですよ。たぶん格闘技とかやってるんです。僕がヘタレだということを差し引いても、到底敵う相手じゃありません」

「お前、自分でヘタレとか言っちゃうんだ…」

兄介は手当を続けながら佳と作戦を練った。どうすればあのレズを妹奈から引き離せるか、二人でクソ真面目に意見を出し合った。

「ギャアアア！ お…お兄さん！ その傷薬、刺激が強過ぎます！！」

「あ、これ傷薬じゃなくて七味だった」

>i30953—210<

「華歩ちゃん、私ちよつとトイレに行ってくるね」

「ええ、行つてらっしゃい」

妹奈は排尿行為に勤しむため、部屋を後にした。

残された華歩は、妹奈の座っていた座布団に頬を擦り寄せ始めた。
「妹奈ちゃん…なんて…なんて可愛い…。嗚呼、愛おしくてたまらない…。後で思い切って抱きしめてみようかしら。いや、それはまだ早いわ。まずは軽いボディータッチから始めましょう。少しずつ、少しずつあの娘をこちらの世界に引き込むの…ウフフ」
その時だった。

「『妹奈がトイレに立った隙にレズを追い出す作戦』開始！！」

兄介と佳が、散々考えた割にはしょぼい作戦の名を叫びながら勢いよく部屋に入ってきた。

「貴様の悪行、見逃すわけにはいかん!!」

突然のことに華歩は驚いた表情を見せるが、すぐに落ち着きを取り戻しニヤリと笑った。

「悪行とはなんのことでしょうか？」

「決まってるだろう、俺の妹を狂った世界に引きずり込もうとしている。そんなことは断じて許さん！」

「お兄さんには言われたくないです。妹奈ちゃんから聞いてますよ、あなたは実の妹である彼女を恋愛対象として見ているそうですね？ それは狂ってないと言えるんですか？」

「ぬう、そうきたか…。お互いに狂っているのなら、議論による解決は諦めた方がよさそうだな」

「そのようですね」

兄介と華歩は構えた。

「では、どちらが妹奈に相応しいか、拳で決めようじゃないか」

「望むところです。あらゆる武術に精通している私の実力、ご覧に入れましょう」

そんな二人の掛け合いに対し、佳はさりげなく「どっちも相応しくないんじゃない？」とツツコミを入れた。

「いくぜおああああ!!」

雄叫びを上げつつ、兄介は強烈な右ストレートを放った。相手が少女だろうとお構いなしである。

(速い! でも:!!)

華歩は迫り来る拳を左手でサバきつつ、兄介の股間に蹴りを食らわせた。

「な…に…い…!」

「柔よく剛を制す…。パワーだけでは、しなやかな身体と人体力学の知識を併せ持つ私には勝てません」

「くう、何を偉そうに! 子供の身体が柔らかいのは普通だし、

キン○マが打たれ弱いのは誰でも知つとるわ！」

兄介は人体力学を勘違いしている。

「それになあ、お前の金的は俺に効いてないんだよおお！」

「え…何故…」

「へっへっへっ、刮目しやがれ!!」

兄介は股間から潰れた大福を取り出した。

「非常食の大福がクッションになってくれたんだよ!!」

「そ…そんな…」

「ああ…かわいそうな大福。こんな姿になっちゃって…」

大福に頬を寄せ、涙を流す兄介。

「股間に入れられてる時点でかわいそうな気がします…」

「やっかましい! これで分かっただろ、俺がどれだけ大きな愛を持った人間か! 妹奈を愛する資格があるのは俺の方だ!」

「なっ…何ですかその理屈は。大福を大事にすることと妹奈ちゃんを愛することは別でしょう」

「浅い! 浅いぜ!! 真の愛を持つ者は無生物をも思いやれるのだ!! お前にはそれが欠けてんだよ!!」

そう叫びながら兄介は大福を床に叩きつけた。

「…あなたが言ってることは全て屁理屈です。愛を軽々しく語らないでください」

睨み合う兄介と華歩。二人はじりじりと距離を縮め、威嚇するように顔を近づけ合った。

「…ったく、しつけれガキだな。俺の方が妹奈を愛してんだっつてんだろ」

「いえ、私の方が彼女を愛しています」

「俺の方が愛してる!」

「私の方が愛してます!」

「いいや、俺の方が愛してる!」

「いえ、私の方が愛しています!」

「俺の方が愛してんだよおお!」

「私の方が愛してるんです!」

…と、調度ここでドアが開き、妹奈が部屋へ戻ってきた。

「二人とも…私がトイレに行ってる間にそんな関係になってんだ。今まさにキスするんじゃないかってくらい顔を近づけた上で、バカプルみたいにどちらが相手のことをより愛してるのか言い合ったりなんかして…。まあでも、私は全然構わないよ。将来、華歩ちゃんがお兄ちゃんと一緒になってくれたら私達姉妹になれるもん。応援してるね、私」

部屋は五秒間、静まり返った。

「ちよちよちよ、妹よ、それは本気で言ってるのか!! 本当にそうなのともいい思ってるのか!!」

「うん、思ってるよ」

「お、お前は俺と結婚したくないのか!？」

「兄妹で結婚なんかできるわけないでしょー。例え兄妹じゃなくても、お兄ちゃんみたいな人とはお断りだけど…」

「う…う…うわああああ!!!」

ショックが大き過ぎたのだろう。兄介は窓を突き破って出ていってしまった（ここは二階）。

>i30991—210<

「妹奈ちゃん、あの…私からも質問、いいかしら？」

「なあに、華歩ちゃん？」

「妹奈ちゃんが女の子に恋をする可能性は？」

「え、そんなこと絶対ないよ! どうしてそんなこと聞くの?」

「あ、いえ、何となく…気になって…。ごめん、私もう帰るわね…。用事があるから…」

「か、華歩ちゃん…?」

華歩は弱々しい足取りで部屋を出ていった。

「…みんないなくなっちゃった…って、あれ!? 佳君、いたの!？」

妹奈は部屋の隅で佇む佳を発見した。

「あの…実は結坂さんに夏休みの宿題を教えてもらおうと思って…」

「あ、そうなんだ！ それじゃあ今から始めようか！ とりあえず飲み物を用意するね！」

そう言い残し、妹奈は部屋を出ていった。

一人残された佳は、ふと妹奈の勉強机に眼を向ける。するとそこには遠足で撮影した佳と妹奈のツーショット写真が置かれていた。握った拳を力強く天に掲げる佳。

「ウィナー！ー！！」

>i30992—210<

伏兵（後書き）

☆4コマ漫画☆

>i28649—210<

>i8629—210<

金より欲しかったモノ（前書き）

明日、心療内科に行ってきます。

心療内科は初めてなので緊張します。この緊張が原因で鬱になりそうです。

…本末転倒！

金より欲しかったモノ

兄介は車検のお金を振り込むため、妹奈を連れて銀行に来ていた。番号札を持って椅子に座っていると、やっぱり銀行強盗が現れた。

「おい、このバッグに金を詰めろ！」

鎖鎌を構える強盗。

店内に「うわああ！」「キャアアア！」と悲鳴が上がる。

「お前ら静かにしろ！ 殺されたいのか！」

強盗は鎖鎌を周りに向け、全員を黙らせた。

「お兄ちゃん…私怖い…。あの武器のチョイスが怖い…」

涙目になりながら兄介の腕に抱き着く妹奈。

そんな彼女の声に強盗が反応する。

「静かにしろって言うてるだ…ろ…」

強盗は妹奈の顔を見た途端、目を見開いて黙ってしまった。

店内にいる者達は不思議そうに強盗を見つめた。

「それでは歌います。『ハイジ・大人ver』」

静まり返る店内で、突然兄介が小声で歌を歌い始めた。

「人はなぜ人を愛するの♪」

周りからクスクスと笑い声上がる。

「教へておじいさん♪ 教へておじ……そ、そんな…死んでる……」

「死んでるんかい！」

強盗は振り向いてツツコミを入れた。

「やはりな…」

兄介はニヤリと口角を上げる。

「な、何が『やはり』なんだ…！」

鎖鎌を振り上げて兄介の方へ歩み寄る強盗。

「あんた、俺の歌にツツコンだろ？ ツツコンでくれる奴に悪い奴はいない！ つまり、あんたは善人ってことだ…！」

「な…何い…！？」

「妹奈こいつの顔を見た時のあんたの反応で『もしや』と思ったんだが、これで確信した！ あんた、妹奈こいつと同じ年くらいの娘がいるだろう？ で、その娘さんは今重病に侵されている。手術には莫大な費用が必要なんだが、あんたには金が無い。だからしかたなく銀行強盗をすることにした…。そうだろう？」

客や銀行員達は一斉に「そうだったのか」と同情の眼差しを強盗に向けた。

「申し訳ありません、先程通報ボタンを押してしまいました。さ、これを持って早く逃げてください。警察には適当に言っておきます」
銀行員は強盗に、お金の詰まったバッグを丁寧差し出した。

「本当にいいのか？」

「はい。このお金で娘さんを救ってあげてください」

「すまねえ、恩に着る！」

強盗はみんなのエアールを背に、銀行を飛び出していった。

「上手くいくといいね、手術」

「そうだな」

兄介と妹奈は、強盗が出ていったドアをしばらく眺め続けた。

強盗は息を切らしながら路地裏に逃げ込んだ。

「ハア…ハア…なんかよく分からんけど、あの兄ちゃんには助けられたな…。ロリコンだからあの娘を見てただけなのに、病気の娘がいるとかいう設定にしてもらっちゃって…」

兄介の言ったことは完全に外れていた。この男に病気の娘などいなかったのだ。

「…………あれ、何だこれ…………涙が…………」

強盗は自分の目から涙が溢れていることに気付いた。

「そういえば俺、人からあんなに優しくされたの初めてかもしれない…」

頬を濡らしながら空を見上げる強盗。曇っていた空から、太陽が顔を覗かせる。

翌日、彼は警察に出頭した。

金より欲しかったモノ（後書き）

「鎌をかけてみたんだよ。鎖鎌だけにな」

とかいう台詞を兄介に言わせようと思ったんですが、いつも以上に苦しいのでやめました。

ツッコミスト（前書き）

> i 2 8 6 7 4 — 2 1 0 <

「オイラのことは気にせず早く本文へ行くでゲス」

ツッコミスト

トイレで大をし終えた兄介は、ドアを全開にして廊下へ出た。

「悪臭よ、家中に充満するがいい!!」

そして彼は上半身を反らしてブリッジをすると、その状態のまま廊下を進み、階段を上がり、ドアを突き破って自分の部屋へ入った。

「うおりゃああ! レポート終わりいい!」

大学のレポートを『ハグキ』の三文字で終わらせると、部屋の窓から「とう!」と飛び下りる。空中で手をバタバタさせて三秒程ホバリングした後、勢いよく落下して庭の地面に人型の穴を作った。

「奇跡的に無傷!」

血だらけとなった兄介は穴から上がると、ガラス戸を突き破ってリビングへ転がり込む。

「ブーメランの練習だ!!」

背中からアボリジニブーメランを取り出す兄介。それを思いきり投げ、リビングの壁に貼られた佳の写真を真つ二つにする。

「ヒヤヒヤヒヤ!! 俺と妹奈のラブリーライフを邪魔する者は滅せよオオオ!!」

テーブルの上でブレイクダンスが始まった。様々な技を繰り出し、最終的には硬くなった股間を中心にコマのように回転し始める。

「今日は五センチを目指すぜ!」

プロペラの要領だろう。回転する兄介の体が少しだけ宙に浮いた。

「いけっ!! いけええ!!」

三センチ程浮かんだところで兄介は力尽き、テーブルに落下した。
「くそおお、五センチいかなかった!! むしゃくしゃするから

妹奈のプリン食ってやる!!」

兄介は台所にある冷蔵庫からプリンを持ってきた。フタを開けて「いただきます」と手を合わせる。

…その時だった。

兄介のこれまでの行動を全て見ていた妹奈が、彼の前に立って大きく息を吸った。

「トイレの臭いを広げるな！！ブリッジで移動しないでホラー映画みたいで怖い！！ドアはちゃんと開けて！！ハグキで終わってどんなレポート！？窓から飛び下りるのやめて危ないから！！手をバタバタさせて空中で停止するとか地面に人型の穴が開くとか昭和のアニメかい！！無傷とか言って血出まくってるし！！何で一々ドアを突き破るの！？だから家でブルーメランを使うのやめてってば！！佳君の写真にそんなことしないで！！ラブリーライフなんて送ってないでしょ！！ブレイクダンスすご！！ていうか何その最低な技！！って浮いたアア！！いや五センチいかなかったけど十分凄いて！！私のプリンを食べるなアア！！そいうえば前書きのおじさん誰！？後書きもなんか恐いよ！！」

妹奈は息を切らし、兄介の腕の中に倒れ込んだ。

「凄い！　凄いぞ妹奈！　俺の『長編ボケ』を全部一気にツッコみやがった！　おまけに前書きと後書きにまでツッコミを入れてやる！　妹奈、お前のツッコミはもう世界レベルだぜ！！」

「えへへ…。ありがとうお兄ちゃん、協力してくれて。私どうしても今の自分のツッコミレベルを確かめてみたかったの」

「妹奈あ…。俺はお前のためなら何だってする。これから力を試したくなったら遠慮なく言ってくれ。ボケまくってやるからさ」

二人のやり取りをこっそり眺めながら、母は涙を流していた。
「下の子も馬鹿になってきてる…」

海へGO!【前編】(前書き)

> i 3 2 8 3 6 — 2 1 0 <

この物語はまだ夏真っ盛りです。

海へGO!【前編】

「天井破壊拳!!」

天井を突き破り、兄介が妹奈の部屋に降り立った。

「お兄ちゃん何てことするの!! 天井に穴が空いちゃったじゃん!!」

「ふっ、天井に穴が空いた? どこにそんな挿絵しょうえがある?」

「作者さああん! 挿絵でお兄ちゃんがしでかしたことを読者さんに伝えて!」

はい、挿絵。

>i31270—210<

「何この気持ち悪い絵!? 天井の有様を描いてって言ってるの!!」

天井なんか描きたくないわ!!

「天井のことはもういいだろ妹奈。それより母さんから聞いたぞ!!」

「え…何を?」

妹奈の顔が強張る。

「お前、友達と海へ行くそうじゃないか」

「あ、うん、そうだよ…」

「メンバーは?」

「えっと…、華歩ちゃんと、空美くみちゃんと、佳君。あと、華歩ちゃんの兄さんが保護者としてついてきてくれるんだって」

兄介はガバツと妹奈の肩を掴んだ。

「バ…バカヤロー! 空美ちゃんって奴以外みんな危険じゃねーか!! いや、空美ちゃんも伏兵という可能性があるから油断ならねえ!!」

「ちよっ…何言ってるの!？」

「お前を襲う可能性のある奴ばかりだって言ってるんだよ!」

「はああ!？」

兄介はドアを開けながら妹奈の方を振り返り、「海へ行くなどとは言わない。そのかわり俺もついて行く!」と言い残して部屋から出ていった。

「ちよっと、お兄ちゃん…!」

深い溜息をつく妹奈。

「大丈夫かなあ。ややこしいことにならなきゃいいけど……」

海水浴当日。

「あんた達、気をつけるのよ! この間川で溺れたばかりなんだから!」

「分かってるよ。んじゃ、行ってくる」

「行ってきまーす!」

玄関先で母に見送られ、兄妹は集合場所である華歩の家へ歩きだした。

「華歩ちゃんの家は大きなお屋敷なんだよ!」

「へえ、あいつんち金持ちだったのか」

「ダックスフントみたいな長い車を持ってるんだよ!」

「リムジンね。なるほど、そいつで俺達を海まで連れてってくれるんだな」

三十分ほど歩き、兄介と妹奈は和風のお屋敷へ到着した。

「この町にこんな立派な屋敷があったとはな！」

兄介は十九年この町で暮らしているが、今の今までこの屋敷の存在を知らなかったらしい。

妹奈がインターホンを押した。「華歩さんの友達の結坂です」と言うと、門がひとりでに開いた。

「こ…これは!!」

門から屋敷まで続く石畳の道。その両サイドに使用人がずらりと並んでおり、屋敷の前では華歩が兄妹の方を眺めていた。

「妹奈ちゃんに万雷の拍手を！」

華歩が言うと、使用人達が拍手をし始める。

「え…えつと…」

顔を朱くしておどおどする妹奈。

「俺には無いのか、拍手！」

兄介が図々しいことを言いだした。

華歩は拍手をやめさせると、使用人達に改めて指示を出す。

「お兄様に万雷の罵声を！」

「あああああ!! よせ、トラウマになる!!」

兄介は両手を思い切り広げ、石畳の上を駆け抜けた。両サイドに

立つ使用人達の頬にパチパチパチパチ！とビンタが当たっていく。

「ハア：ハア：、よう華歩」

使用人を全滅させ、兄介は華歩の前にたどり着いた。

「兄介さん、何で貴方まで来てるんですか。殺されたいんですか？」

「へっ、妹を護るためなら俺はどこへだって行くぜ」

二人が睨み合っていると、門の方から妹奈が小走りで近づいてきた。

「華歩ちゃん、おはよう！」

華歩はスッと表情を変えると、「おはよう、妹奈ちゃん」と言いながら兄介の向こう側にいる妹奈の元へ歩み寄った。

（こいつ…、妹奈の前ではおしとやかぶりやがって…）
拳を握りしめる兄介。

「あ、結坂さんもう来てたんだ！」

門の方から声が聞こえてきた。三人が首を向けると、荷物を背負った佳が「結坂さぁくん」と言いながら走ってきた。

「気安く妹に近づくな！」

「うげえ！」

佳の首に兄介のリアットが炸裂。

「うう…何でお兄さんがここに…」

「お前にリアットするためだよ」

「そんな…！」

ショックを受ける佳。そんな彼の背中に、華歩がぴたりと体を寄せた。

「え…あの…」

佳の頬が紅潮する。だが華歩が耳元で「この間あれだけ殴られた

のに、よくのこの私の家へ来られたわね」と囁くと、すぐにその顔は青く変色してしまった。

(き…危険だ！ このメンバーは危険過ぎる！ でも僕は負けない…！ 絶対に『結坂さんの水着姿』を拝むんだ…！)

佳がいつになく勇ましい。エロパワーは偉大である。

「みんな、おっはよー！」

快活な声が聞こえてきた。

小麦色に肌を焼いた短髪の少女が、門をくぐって駆けて来る。

「妹奈、あの子が空美ちゃんか？」

「うん、大野空美ちゃん！ すっごく元気で、いつも動いてるの！ 止まると息が苦しくなるんだって！」

「そりゃ難儀だな」

空美は佳の前にやってくると、サンダルを脱いで彼のツンツン頭に足の裏をなすりつけ始めた。

「ちょ、大野さん、何やってるの人の頭で!？」

「アハハ！ こそばゆい!!」

気持ち良さそうな空美。それを見ていた兄介が「俺もやってみよ」と言って足の裏を佳の頭に乗せてぐりぐりさせる。

「二人共やめなよ！ 佳君がかわいそうでしょ!!」

見兼ねた妹奈が二人を注意した。

しかし…

「でもこれ超気持ちいいんだよ！ お前もやれば分かるって！」

「え、そんなに気持ちいいの…?」

妹奈はサンダルを脱ぎだした。

「ひい！ そんな、結坂さんまで！」

佳の双眸から涙が噴き出す。

「お前達、イジメは感心しないな」

屋敷の戸が開いた。中から眼鏡をかけた青年——真田流歩が現れた。

「え、お前、何で…！」

声を上げる兄介。すると流歩も驚きを露にした。

「ゆ…結坂、なぜお前がここに…」

「お前こそ、何で他人の家から出てきてんだよ！ 泥棒か!？」

「他人の家？ 違う、ここは俺の家だ」

「え…お前ん家？ …ってことは、まさかお前が華歩の…」

「ああ、俺が華歩の兄だ」

海へGO!【前編】（後書き）

兄介

「佳、お前が海へ行ったら大変な騒ぎが起きるんじゃないか？」

佳

「え、どうしてですか？」

兄介

「ウニの化け物と間違えられるかもしれないだろ」

佳

「ええ!!!？」

兄介

「お前NASAに連れていかれるぞ」

佳

「そんなあ!!！」

妹奈

「佳君、真に受けちゃ駄目…」

海へGO!【中編】（前書き）

【海水浴メンバー】

『結坂兄介』

最低なシスコン野郎。今回の海水浴には強引についてきた。

『結坂妹奈』

兄介の妹。実は佳と華歩と空美に海水浴に行こうと持ち掛けたのは彼女。

『佳』

へたれウニ。妹奈のことが好き。

『真田流歩』

ホモメガネ。兄介のことが好き。しかしその事実は誰も知らない。

『真田華歩』

流歩の妹。妹奈のことが好きなレズビアン。その事実は兄介と佳だけが知っている。

『大野空美』

元気いっぱいな体育会系少女。行動がこの小説くらい読みにくい。

海へGO!【中編】

なんと、華歩の兄は兄介に恋をするホモ、真田流歩であった。

「私のお兄ちゃんと華歩ちゃんのお兄さんが同じ大学に通ってるなんて知らなかったよ!」

妹奈は驚いた表情で兄介と流歩を見た。

兄介と流歩は向かい、会話を始める。

「真田流歩、だっけか? まさかお前が華歩の兄だったとはな。驚きだ」

「結坂、俺もまさか、お前が妹の友達の兄だとは思わなかった。今日一日よろしく頼む」

流歩は手を差し出した。兄介は「あ、ああ…」と言いながらその手と握手を交わした。

(これが結坂の手か。男らしい良い手だ)

どうやら流歩が握手を求めたのは、兄介の手を触るのが目的だったらしい。さすがホモ。

もちろん、周りの者達はそんなこと知る由もない。

「華歩ちゃんのお兄さんは礼儀正しいんだね。うちのお兄ちゃんとは大違い」

妹奈は華歩に耳打ちした。

「な、なんだと妹奈! 俺だって最低限の礼儀はわきまえてるぞ!」

「お兄ちゃん、耳良すぎ!」

兄介、妹奈、流歩、華歩、佳、空美の六人は、リムジンに乗り込んだ。

「何この広い車！　うちのは四人しか乗れないのに！」
騒ぐ空美。

「妹奈ちゃん、何故こんなやかましい人を誘ったの？」
不満げな華歩に対し妹奈は苦笑いする。

「あはは…、私は賑やかで楽しいと思うけど」
車が走り出す。すると一人、体調不良を訴える者が現れた。

「酔いました…」

「佳君、大丈夫！？　　ていうか十メートルで酔う人初めて見た！」
「ヘタレとはそういうものだよ…」
自分で言うなって。

「ヘタレは関係ない。三半規管が他の者より未熟なのだろう」
流歩はそう言いながら窓を開けた。

「車酔いには換気が効果的だ。あと、これを舐めるといい」
さらに飴を取り出し佳に手渡す。

「あ、ありがとうございます」

札を言うと、佳は飴を口に入れた。

「いいなあ、華歩ちゃんのお兄さんは。何でも知ってるし、優しい…。本当にうちのお兄ちゃんとは大違いだよ」
ため息をつく妹奈。

「な…何イイ！？　　酷いじゃないか妹奈！！　　くそおお、流歩め

！！　　俺の妹を誘惑しやがって！！」

「ゆ…結坂、それは大いなる誤解だ。華歩、お前からも何か言ってくれ…」

華歩に助けを求める流歩。しかし華歩も流歩を恐い顔で睨んでいた。

>i33733—210<

（たとえお兄様でも妹奈ちゃんを誘惑することは許さない）

車が走り出してから一時間三十分が経過した。

「見て見て見て！ 海海海！」

窓に張り付きながら空美が騒ぐ。それによって全員の視線が窓の外へ向けられた。運転手も同じ方を見てしまい、危うく事故りかけた。

「楽しみだなあ！」と佳。

「早く泳ぎたいね！」と妹奈。

海が見えたことで車内の雰囲気はより明るくなる。

しかし…

「あれが海か。初めて見るぜ」

兄介のこの発言で車内は静まり返った。

一行は海に到着した。

時期が時期だけに、海水浴場にはたくさんの人がいる。

「作者がこの話を書いているのは十月下旬だがな」
余計なことを言うな。

「ねえ、場所あそこにしよ！」

空美が砂浜の空いているスペースを指差した。他の者達はそれに賛成する。

「うおら、死ねエエエ！！」

兄介は高く飛び上がると、閉じた状態のパラソルを砂浜に突き刺した。

「お兄ちゃん、パラソルを乱暴に扱わないで！」

「お前に乱暴したい気持ちはこのパラソルにぶつけてるんだ」

「思う存分パラソルを乱暴に扱って！」

シートを敷き、パラソルを開くと、六人は更衣室で水着に着替えた。

「うおお！ 妹奈の水着姿かわいすぎるウウウ！！」

兄介が涙を流しながら妹奈の背中に飛び掛かる。しかし華歩が昇龍拳を使ってそれを阻止した。

「あれ、今なんかアゴが砕けるような音がしなかった？」

妹奈が振り返ると、兄介が砂浜に頭を突っ込んでもがいていた。

「さてと、浮輪でも膨らめますか。空気入れあるか？」

兄介が尋ねるとみんなは荷物を確認し一様に首を振った。

「誰も持ってきてきてねえのか！？ しょうがねえな、息で膨らませるか」

兄介は大きな浮輪を息で膨らませ始めた。

半分程息を吹き込んだ所で、流歩が「結坂、俺に交代しろ」と言

いだす。

「おう、悪いな」

「気にするな」

兄介は流歩に浮輪を渡した。

「やっぱり華歩ちゃんのお兄さんは優しいね」

周りの者達は流歩の行いに感心するが、その動機はろくでもないことだったりする。

（よし…、結坂と間接キスだ）

場所取りを終え、浮輪も膨らませ、準備は万端。

「さ、みんな遊ぼう！」

六人は海へ走りだした。

「あ、流歩は荷物見張っててくれ」

「そ…そんな…」

海へGO!【中編】（後書き）

兄介

「『妹』と『ヒトデ』って似てるよな」

妹奈

「え、何で？」

兄介

「ヒトデって星みたいな形じゃん」

妹奈

「うん」

兄介

「つまり、海シーの星スターってことだよな？」

妹奈

「…ああ、もう何を言いたいのか分かったよ。」

海シーの星スター

←

シースター

←

シスター

ってことでしょ？

相変わらず無理があるよ」

兄介

「そんな…六時間もかけて考えたのに…」

妹奈

「六時間！？ 人生大切にしなよ！！」

海へGO!【後編】(前書き)

> i 3 4 0 1 1 — 2 1 0 <

自分に好きなことをやらせてあげてください。

それが結果的に自分、そして周りの人達の幸せに繋がります。

海へGO!【後編】

「私達は砂浜のアイドル、マリシスターズ（自称）。ビーチの男共を一人残らず虜にしてみせるわ」

>i34007—210<

イタイ台詞を発しながら、グラマラスな女性二人が砂浜を歩いている。

彼女達とすれ違う男達は皆、鼻の下を伸ばしながら振り返ってしまふ。

「あら？　姉さん、見てよあそこ。イケてるメンズが約二名」

>i34008—210<

「わお、これは狩るしかないわね」

マリシスターズはターゲットへと歩み寄る。

「こんにちは」

缶ジュースを持って歩いている兄介と流歩に、笑顔で挨拶をするマリシスターズ。

「今日は二人で来てるんですか？」

「いや、子供達と来ている」

兄介がマリシスターズの質問に応えていると、流歩が小声で彼に「これは逆ナンというやつだぞ結坂」と伝える。

「逆ナン？　お前ら俺達をナンパしてんのか？」

「え、今気付いたんですかあ？」

「そりゃ最初に『これはナンパです』と言ってもらわなきゃ分かんたろう。俺はエスパーじゃないんだ」

じゃあ流歩はエスパーなのか。

「悪いがナンパはお断りだ」

「申し訳ありません。俺もナンパはお断りです」
兄介と流歩はきっぱり断った。

するとマリシスターズの態度が一変する。

「何よあんたら、マジつまんないんだけど!」

「こんな美女二人組の誘いを受けないなんて日差しに頭やられてんじゃないの!？」

暴言を吐きながらマリンスターズは去っていった。

(俺は妹奈一筋なんだよ)

(俺は結坂一筋だ)

お前ら残念にも程があるぞ。

「ジュース買ってきたぞ」

パラソルの下で休憩している妹奈達の元に兄介と流歩が戻ってきた。

「二人共、さっきナンパされてませんでした？」

ニヤニヤしながら佳が尋ねる。

「ああ、ジュース買って戻ってくるまでの間に三回ナンパされた」

「さ、三回も！ お兄さん達カッコイイですね」

佳のこの発言に妹奈は首を傾げた。

(華歩ちゃんのお兄さんは分かるけど、うちのお兄ちゃんってカッコイイのかなあ…)

毎日兄介の奇行を目の当たりにしているためだろう、妹奈には彼がかっこよく思えないようだ。

「妹奈、ジュースを飲んだらちよつと遠くまで泳いでみないか？

お前は浮輪使っていいからさ」

「うん、いいよ」

兄介の提案に妹奈は頷く。

「私も一緒にします」

「ぼ、僕も行きます！」

華歩と佳が参加すると言い出した。

（くそ…、せっかく妹奈と二人きりで海を満喫しようと思ったのに）

チッ、と舌打ちをする兄介。

「ブハハハハ！！　ついてこられるもんならついてきやがれ！！」

>i34010—210<

浮輪に入った妹奈を物凄いスピードで引っ張って泳ぐ兄介。華歩と佳は必死に後を追うが、どんどん距離を離されてしまう。

「全然追いつかない！　お兄さん、なんてスピードなんだ…！！」
ビート板＋バタ足の佳が嘆く。

（あの人、妹奈ちゃんを一人占めにするつもりのようなね。まったく、いつも同じ屋根の下で生活してるくせに…）

クロールをしながら華歩が頭の中で愚痴る。

だがしばらくすると兄介達は引き返してきた。

「ウオオオ！！　ネット越えたらサメがいたアアア！！」

どうやらサメ避けネットの向こう側まで行ってしまったらしい。アホである。

兄介達は砂浜に戻った。

「うわぁあん！　トラウマ決定だよおお！」

サメに追われた恐怖で妹奈は泣き出してしまった。

「す、すまない、妹奈…」

「お兄ちゃんなんか嫌い！」

「そんなアア！！」

兄介は崩れ落ちた。

「妹奈ちゃん、こんな危ない人ではなく、私と遊びましょう」

「うん」

妹奈は華歩と砂の城を作り始めた。それを見て兄介はさらに落ち込む。

「結坂、元気を出せ。俺達も一緒に砂の城を作ろう」

兄介の肩にポンと手を置く流歩。

「はぁ？　何でいい歳した野郎二人が一緒に砂遊びしなきゃいけないんだよ」

「う…、すまない」

流歩も落ち込んだ。

「あの…、僕も城作りに参加してもいいかな」

佳は恐る恐る妹奈と華歩に問い掛けた。華歩は嫌そうな顔をしたが、妹奈は「もちろん！」とOKした。

少しずつ、少しずつ、三人の手によって砂の城が形を成してくる。しかし…

「ナマコ・アタアアック！！」

「うわあああ!!」

どこからともなく飛んできたナマコに佳が驚き、その拍子に砂の城を壊してしまった。

「なんてことしてくれるのかしら」

怒った華歩は佳の股間を（妹奈に気付かれないように）握り潰した。

「ぎゃひん！」

変な声を出して倒れ込む佳。

「ぬひよひよ！ ナマコアタックの効果は抜群よのう！」

奇笑を上げながら兄介が歩いてきた。

「ひ：酷いですよお兄さん：」と嘆く佳。

「あなたの仕業でしたか」と憤る華歩。

「お前達、喧嘩は良くないぞ」

この状況を見兼ねた流歩が仲裁に入る。だが華歩が小声で「ホモは黙ってて」と呟くと、彼は焦りだした。

「華歩：何故それを…」

「見てれば分かるわ。何年兄妹やってると思ってるの。というか兄様だって私のこと、気付いてるんでしょ？」

「あ：ああ、お前はレズなんだろう。前から気付いていたさ」
「なんちゅー会話だ。」

「兄様、これからはなるべく私に協力して。私も兄様に協力するから」

流歩は「分かった：」と言って身を引いた。

華歩は妹奈を見据えた。すると兄介と佳が彼女の前に立ちはだかる。

（妹奈は渡さねえ！）（結坂さんは渡さない！）

張り詰める空気。何が起こってるのか分からない妹奈は、一人おろおろとしている。

その時だった。

「キャハハハハ!!」

大きな笑い声。

五人の視線が一斉に同じ方向へ向けられる。

「空美ちゃん…!」

笑い声の主は空美であった。彼女は頭にクラゲを乗せ、両手にはナマコを持ち、華麗にサーフィンをしていた。

「…あの子は全力で海を楽しんでいる。それなのに俺達ときたら…」

苦笑する兄介。

「よし…泳ごう! お前ら俺についてこい!!」

兄介は海へ走りだした。佳が「待ってください!」と言って後に続く。

「えっ、えっ、何で!?!」

妹奈が慌てて二人を追い掛ける。

「ああ! 妹奈ちゃん、待って!」

華歩は妹奈を追い掛ける。

一人残された流歩は、空美を眺めて微笑を浮かべた。

「ありがとう…」

空が赤くなり始め、本日の海水浴は終わりを迎えた。

遊び疲れたのだろう、流歩以外の者達はみんな車に揺られながら眠ってしまった。

（みんな寝ているのか…）

流歩は無防備な兄介を見て、唾を飲んだ。

（これは…接吻のチャンス）

おもむろに、兄介の唇に自分の唇を近づける流歩。
だが…

「ハックシヨイ！」

兄介がくしゃみをした。それによって流歩の眼鏡は鼻水塗れとなる。

「寒…、冷房効き過ぎてんな」

兄介は目を開いた。すると目の前には眼鏡をベトベトにした流歩がいた。

「お…お前…プツ…ハハハハハ！！ 眼鏡っ娘が顔射されたみたいになってるぞ！！」

「わ…笑うな。お前がくしゃみしたせいだぞ」

「悪い悪い！ でも何でお前は俺と向かい合ってたんだ？」

「そ…それは…小さな虫がお前の鼻に入っていくのを防ごうとしていたからだ。だがさっきのくしゃみで虫は出ていったようだな、良かった」

そう言い訳して流歩は席に座り直した。

「流歩」

「…ん、何だ？」

「お前って良い奴だよな」

「ゆ…結坂…」

流歩にとって今日という日は一生の思い出になることだろう。
作者にとってもBL要素を含んだ今回の話は一生の思い出になる
ことだろう。

イカれた日記（前書き）

登場人物紹介

>i34146—210<

【吉村先生】

妹奈の担任教師。

まだまだ半人前だが、生徒を想う気持ちは強い。
Aカップなのが悩み。

イカれた日記

夏休みが終わり、今日から小学校の新学期が始まった。

「吉村先生おはようございます!」

登校してきた妹奈が校門で担任の吉村に挨拶をする。

「おはよう結坂さん! 夏休みは楽しかった?」

「はい、楽しかったです!」

吉村は今年教師になったばかりの若い女性だ。ボブヘアで黒ぶちメガネをかけている。

ドジでのろまな性格故、保護者からは「大丈夫なのかあの教師?」などと囁かれているが、生徒からの人気は高い。

今日は始業式がメインなので通常授業は行われない。なので吉村の主な仕事は、生徒から夏休みの宿題を回収し、後でそれをチェックすることだ。

吉村は生徒達が下校すると、一人静かな教室で集めた宿題に目を通し始めた。

彼女が最初にチェックし始めたのは夏休みの日記だ。

「プールへ行った子、キャンプへ行った子、海外旅行へ行った子…みんなよく書いてるわね。読んでる私まで楽しくなってくるわ」ニコニコしながら生徒達の日記を読んでいく吉村。だが、ある生徒の日記で彼女は困惑することとなる。

「この子は夏休みどこへ行ったのかなあ。えーっと…なにになに…」

『7月25日 川で溺れて賽の河原へ行きました。鬼がたくさん出てきて恐かったけど、お兄ちゃん達がやっつけてくれました。』

「そっかあ、結坂さんは賽の河原へ行ったんだあ！ ……………え？」

吉村はもう一度日記を読み返した。

「さ、賽の河原アア！？」

教室に吉村の声が響く。

「い：いや：落ち着くのよ私：。これは結坂さんのユーモア。うふふ、あんな真面目な子がこんな面白い日記を書くななんてね」
そう言いながら、妹奈の日記をパラパラめくる。

『8月5日 夜、お兄ちゃんと一緒に蚊をたくさんやっつけました。その後いきなりお兄ちゃんが私をベッドに押し倒しました。でも警察の人がお兄ちゃんを捕まえてくれたので助かりました。』

「お兄さん捕まっちゃった！！」

『8月6日 お兄ちゃんが釈放されて戻ってきました。いつもより早いなーって思いました。』

「慣れっこ！！？」

『8月11日 友達の真田華歩ちゃんと遊びました。お兄ちゃんが窓を突き破りました。華歩ちゃんは肩を落として帰ってしまいました。その後いつの間にか部屋にいた佳君に宿題を教えてあげました。』

「状況がよく分からないんだけど…」

『8月15日 お兄ちゃんと銀行にいたら、強盗さんが入ってきました。実は強盗さんには病気の子供がいて、手術費が欲しくて強盗をしたそうなのです。銀行の人達は強盗さんに快くお金を渡しました。良かったです。』

「良くないよね!？」

『8月20日 今日はお兄ちゃんがボケまくってくれたので、たくさんツツコミを入れることができました。ツツコミストとしてこれからも頑張りたいです。』

「え、結坂さんってツツコミの方なの!？ 日記を見る限りそうは思えないんだけど…」

『8月24日 みんなで海に行きました。サメに追い掛けられたのはトラウマだけど、楽しいことがたくさんあったので行って良かったです。来年もまた海へ行きたいです』

吉村は笑みを浮かべた。

「ちょっと心配になるような内容もあったけど、なんだかんだで楽しい夏休みを送れたみたいね。先生嬉しいわ」

パラパラと、残りのページをめくる。

『9月3日 お兄ちゃんが襲い掛かってきたので殴り倒しました。日記に血がついてしまいました。先生ごめんなさい』

日記帳のラストには血飛沫が付着していた。

「…もしもし、結坂さんのお宅ですか？ 妹奈さんの担任の吉村です。あの、ちょっとご家庭のことをお伺いしたいのですが…」

授業参観（前書き）

兄介が妹奈の学校へ突入する！

授業参観

妹奈は学校でもらったプリントを母に渡した。

「来週の木曜日、授業参観があるの。お母さん来れる？」

妹奈が尋ねると、母は申し訳なさそうな顔をする。

「妹奈、ごめん！ 来週の木曜はパートなの！ どうしても休めないのよお！」

「えー、そうなんだ…」

残念。妹奈はため息をつきながら母に背を向けた。

すると背後に立っていた兄介と向かい合わせになる。

「俺がいるじゃない！」

兄介は自分の顔を親指で指し示した。

「え……お兄ちゃんは来なくていいよ」

「何でだーい！ 酷いじゃない！」

「だってお兄ちゃん、絶対みつともないことするもん！」

「駄目なのかーい!？」

「駄目だよ！ ていうかみつともないことするつもりだったんだね！」

妹奈は「絶対来ないでよ！」と言い残して自分の部屋へ戻っていった。

「くそお、妹奈め。思いつき拒否しやがって」

愚痴る兄介。そばにいる母は「あきらめなさい」と苦笑する。

「いや、俺は行くぞ！ あいつが勉強に勤しむ姿をこの目に焼き付けるんだ！」

「妹奈に嫌われちゃうわよ」

「大丈夫、俺だと分らないように変装していくさ」

兄介は自分の部屋に戻ると、変装アイテムを作製し始めた。

授業参観当日。教室の後ろにはたくさんのお母さんが集まっていた。

「なんだか緊張するね、結坂さん」

佳が斜め前の席に座っている妹奈に声をかける。

「うん。でもうちのお母さんは今日来られないから、その分みんなよりは緊張が少ないかな」

「結坂さん…」

寂しそうな表情を見せる妹奈。

その時だった…

ドカーン！！！！

> i 3 4 2 6 7 — 2 1 0 <

ドアをブツ倒しながら、なんか変な奴が教室に入ってきた。

頭にはバケツを被り、体にはダンボールを纏うという、怪し過ぎる出で立ちだ。

(なんか来たー！！！！)

教室にいる全ての者達が恐怖に戦く。

(顔も体も隠した完璧な変装だ！ 妹奈もまさか俺だとは思えない！)

バケツの中でニヤリと笑みを浮かべる兄介。

しかし：

（も～～！！ お兄ちゃんの馬鹿！！）

妹奈にはバレていた。

こんな変装をするくらいなら、まだ普通の格好をした方が妹奈に気付かれる可能性は低かったかもしれない。

「あ：あの：」

担任の吉村が、恐る恐る兄介に近づく。

「あなたは：何なんですか？」

「拙者、保護者でござる」

まさかの武士設定。

「そうなんですか！ （良かった、てっきり変質者かと！）」

保護者兼・変質者だろ。

「では授業を始めます！」

吉村は黒板に分数の問題を書いた。

「解る人！」

多くの生徒が一斉に「はい！」と手を挙げる。

（：ったく、どいつもこいつも遠慮ってもんを知らねえな！ 何で妹奈に活躍させてやろうとしないんだよ！）

理不尽な想いを抱きながら、兄介は吉村に『妹奈を当てろ！』というジェスチャーを送った。

「じゃあ、米崎君！」

だがその想いは届かなかった。

指名された米崎という生徒が黒板に答えを書く。

「はい、よくできました！」

得意げな表情で席に戻る米崎。そんな彼の首根っこを兄介が掴む。
「イイ気になるなよ小僧。妹奈ならあんな問題コンマ三秒で解けたはずだ」

米崎は「え…えっと…ごめんなさい」と言っただけで泣きだしてしまっただけだ。

「お兄ちゃんやめてよ!」

咄嗟に妹奈が立ち上がる。すると教室中の視線が彼女に注がれた。

「え、あの変な人、結坂さんのお兄さん?」

「マジかよ、あんなのが兄貴なんて最悪だな」

ヒソヒソ声がそこら中から聞こえる。妹奈は顔を真っ赤にしながらいきなりうずくまってしまった。

（うう…他人のフリしてやり過ぎつもりだったのに、思わず『お兄ちゃん』って言っちゃった…。ああもう、恥ずかしくて死にそうだよ…）

その時だった。

突然廊下の非常ベルがジリリリリと音を発し始める。

『二階理科室より火災が発生しました。ただちに運動場へ避難してください』

この放送により、教室内はパニック状態と化す。生徒だけでなく保護者まであわてふためいているという有様だ。

「み、みんな落ち着いて! 私の指示に従って!」

必死に場を鎮めようとする吉村。しかし喧騒に掻き消され、彼女

の声は誰にも届かない。

「みんな落ち着け!!!」

兄介が叫ぶ。それによって教室は静かになった。

「廊下に出て二列縦隊に並ぶんだ」

兄介の指示に従い、教室にいる者達は皆、廊下で並び始めた。

「よし、全員並び終えたな。みんな離れず俺についてこいよ」

兄介を先頭に、廊下を進んでいく。目指すは運動場だ。

「おい、結坂」

ふと、妹奈の隣を歩く男子が口を開いた。

「お前の兄ちゃん、カッコイイな。ちよつと変わってるけど」

妹奈は驚いた表情を浮かべた。しかしすぐに笑顔で「うん」と頷いた。

運動場に出た。

吉村は兄介の元に歩み寄り、何度も頭を下げた。

「本当にありがとうございます！ 私だけじゃ絶対どうにもなりませんでした！」

「いいってことよ！ でも次は頑張ろうぜ！ 先生にや生徒を護るって使命があるんだからな！」

「は、はい！」

二人の会話が途切れた直後、兄介の頭のバケツが背後から脱がさ

れた。

「誰だ!？」と兄介が振り向くと、妹奈がバケツを抱えて彼を見上げていた。

「あ、妹奈!」

「お兄ちゃん、もう変装なんてなくていいよ」

「お前…俺だって気付いてたのか?」

「うん、最初から分かった」

兄介は頭を掻きながら「ごめんな、来るなって言われてたのに」と謝った。

「ううん、謝るのは私の方だよ。私、お兄ちゃんのことを恥ずかしいだなんて思ってた…。本当にごめんなさい」

妹奈は深々と頭を下げた。

「妹奈…」

兄介が素顔を曝したことで、ミーハーな女子達が騒ぎ始めた。

「結坂さんのお兄ちゃん、イケメンじゃん!」

「いいなあ、羨ましい!」

「なんだかあのダンボールも最先端ファッションに見えてきた!」予想外の反応に、兄介と妹奈はオロオロする。

「あの…」

不意に、吉村が兄介に声をかけた。

兄介が振り返ると、吉村が紙切れを握ってモジモジしていた。

「あ…あの…これ…メアドです…よかったら…メールしてください」

> i 3 4 3 0 4 — 2 1 0 <

教師、何してんねん！

乱れ妹奈（前書き）

最近ほんと寒くなりましたね。

みなさん、手洗いうがいは絶対にしましょう。

> i 3 4 8 8 8 — 2 1 0 <

乱れ妹奈

「横暴過ぎんだろ、都条例。日本は民主主義だぞ」

ソファ―でテレビのニュースを観ながら文句を言う兄介。

そんな彼の元に、妹奈がちょこちょこ歩み寄ってきた。

「お兄ちゃん！」

「ん？ どうした妹奈……って、ウオオオオ！！！」

兄介は叫び声を上げながらソファ―ごと転倒した。

「な…なな…何してんだ妹奈…？」

兄介の目の前でワンピースを捲くり上げる妹奈。純白のパンツを大胆に露出させている。

> i 3 4 8 8 7 — 2 1 0 <

「お兄ちゃん、私のパンツ好きなんですよ？ どう？ 嬉しい？」

「あ…ああ…そりゃ嬉しいけど…」

「じゃあもつとイイもの見せてあげる！」

そういうと妹奈はワンピースを脱ぎ始めた。

「ちよーっとな待て妹奈！」

「なあに？」

「お前、それ脱いだらどうなるか分かってんだろ？ 確かに俺に襲われるぞ！ お前はもつと自分を大切にする子だったはずだ！」

「…お兄ちゃん」

「な、何だ？」

「御託はいい。見たいの？ 見たくないの？」

人差し指を唇に当てながら、上目使いで兄介を見る妹奈。

「み…見たい」

兄介はハアハア言いながら正座した。

（何があったか知らんが、今の妹奈はべらぼうにエッチだ！　こりやもしかしたらいける所までいけるかもしれんぞ！）

期待に胸を膨らませる兄介。
しかし…

「ああ…ダメ…眠くなってきた…」

妹奈は床で大の字になり、眠ってしまった。

「え…ええええ！？　寝ちゃうんかい！」

「生殺しはやめてくれよなあ」

不満を漏らしながら、兄介はキッチンへと足を運んだ。

お茶の入った容器を冷蔵庫から取り出し、コップに注ぐ。

と、その時、兄介はテーブルの上に転がっているチューハイの空き缶に気がついた。

「こ、これは…！　なるほど、あいつジュースと間違えてチューハイを飲んだんだな…」

今回、二つのことが判明した。

一つは、妹奈は酔うと脱ぎ魔になるということ。

もう一つは、妹奈の方から迫ってくると兄介は怖じ気づいてしま
うということだ。

採める男達（前書き）

【登場人物紹介】

『真田流歩』

兄介と同じ大学に通うホモ野郎。

『女子学生達』

真田流歩に夢中になっている。

変態である兄介のことを疎ましく思っている。

揉める男達

大学の中庭で、兄介と流歩が何やら揉めている。

「結坂、お前は間違ってる…」

「いいんだよ、俺はずっとそうしてきたんだ！」

その様子を、二人の女子学生が物影から伺っていた。

「どうしたんだろ、あの二人…」

「どうせまたあの変態野郎が真田君を怒らせたのよ！」

流歩は兄介の肩を掴んだ。

「結坂、一生消えない傷を負うかもしれんのだぞ」

「うっせーな！俺はもう決めたんだよ、ブツ潰すってなァ！！」

「なっ…よすんだ結坂！」

兄介の態度を見て、女子学生達は憤りを露にした。

「結坂君、あんな言い方しなくても…。真田君は結坂君のことを心配してくれてるのに」

「ほんと嫌な奴よね、あの変態！」

「でも『潰す』って何のことだろ…。結坂君、何か危険なことに足をつっこんでるのかな…」

「たぶん『族』が絡んでるのよ！あいつ馬鹿だから喧嘩売ったんだわ！」

兄介の手に何かを渡す流歩。

「頼む、これを使って解決してくれ」

「これは…！」

女子学生達は「あっ！」と声を漏らした。

「真田君、お金を渡したみたいだよ…！」

「そんな、何もそこまでしなくてもいいのに！」

「これで無駄な血が流れずに済む」

流歩は兄介に背を向け、立ち去った。

一人残された兄介の元に、女子学生達が歩み寄る。

「結坂、あんた真田君に感謝するのよ。命を救ってもらったようなものなんだから」

兄介は首を傾げた。

「命？ 何言ってるんだお前」

「何って…！ 真田君からもらったその和解金で、族に殺されずに済むじゃない！」

「和解金？」

「あんたが手に持ってるそれよ！」

女子学生は兄介の手首を掴んで引き寄せた。

「あれ…？」

兄介の手に握られていたのは金ではなく、ニキビの薬だった。

「鼻の横にでかいニキビができちまってさ。それを潰すって言ったら、流歩の奴が『跡が残るからやめろ』って文句言ってきたよ。で、この薬もらった」

女子学生達は去っていった。

採める男達（後書き）

まっすぐなパンチはガードされてしまう！

むちゃくちゃなパンチは相手に当たらない！

予測不能なパンチを的確に命中させていく、それが理想！

読者の皆さんに、俺のパンチがクリーンヒットしてるといいな＜＜；

ジェラシスター（前書き）

【登場人物紹介】

> i 3 6 0 2 3 — 2 1 0 <

『大野空美』

妹奈と同じクラスの少女。めっちゃめっちゃ元気で常に動き回っている。兄介と気が合う。

ジェラシスター

リビングの天井に張り付いている兄介の元に、妹奈が歩み寄ってきた。

「お兄ちゃん、今日うちに友達が来るよ」

「男か!？」

「ううん、女の子だよ。この前一緒に海へ行った大野空美ちゃん」
「おお、あの元気娘か!」

「ところでお兄ちゃん、何で天井に張り付いてんの？」

「決まってるだろ、お前をビックリさせるためさ!」

「ふうん。私、もうそんなことじゃ驚かないよ」

「そ、そんな! ずっとこの状態で待ってたのに!」

「どんだけ暇なの、お兄ちゃん…」

「なあ妹奈、お前も一緒にどうだ? 張り付いてみないか？」

「私にそんなことできるわけないでしょ…。例えできたとしても絶対やらないよ。みっともないし」

「……………」

兄介は天井から下りると、台所から包丁を持ってきて自分の手首に押し当てた。

「最近の妹奈は冷たい。もう生きてるのが辛い」

「ごめんお兄ちゃん! 私が悪かったよ! はやまらないでエエエ!」

「おじやましーっす!」

空美が結坂家に到着した。

「いらっしやい、空美ちゃん」

「よう、久しぶり」

妹奈と兄介が彼女を迎え入れる。

「空美ちゃん、外は寒かったでしょ」

「うん！ でも全然平気！ 子供は風の子だからね！」

そう言う空美はコートを脱ぎ、半袖になった。

「偉い！ やっぱ子供はそうでなきゃな！」

兄介が褒めると空美は照れ臭そうに笑った。

「どれ、俺と一緒に天井に張り付くか？」

「うん！ おもしろそう！」

仲良く天井に張り付く兄介と空美。

「ちよ…ちよっとお兄ちゃん、空美ちゃんを取らないでよ！」

妹奈の声も聞こえないくらい、二人は天井張り付きに夢中になっていた。

「なんかお前とは気が合うなあ！ 他人とは思えないぜ！」

楽しそうに空美に話し掛ける兄介。

そんな彼の姿を見て、妹奈の心に複雑な想いが芽生えた。

（お兄ちゃん、私という時よりもずっと楽しそう…。そりゃそうだよな、空美ちゃんは私と違ってノリがいいもん…。お兄ちゃんは空美ちゃんみたいな妹が欲しかったんだろうなあ…）

次の日の朝。

「ま…妹奈！ お前、どうしたんだその痣！」

妹奈は体中に痣を作っていた。

「何でもないよ」

「何でもないわけないだろ！」

ガバツと妹奈の肩に手を置く兄介。

「ほっというて」

妹奈は兄介の手を振りほどき、ランドセルを背負って家を出ていってしまった。

「妹奈…」

その日の深夜。

兄介は自分の部屋から出ると、忍び足で妹奈の様子を見に行った。

「いないな…」

部屋に妹奈がいないことを確認すると、今度はリビングの方へ移動する。

階段を下り、廊下を進み、リビングのドアの前に到着した。

「明かりがついてる…」

兄介は静かにドアを開け、中の様子を伺った。

「ハア…ハア…もう一回…！」

天井に向かってジャンプする妹奈。しかし天井に触れることもできないうま、背中から床に落下してしまう。

「う…うう…何で…何で私は張り付けないの……」

妹奈は半泣きになってしまった。

「ダメだ…お兄ちゃんのあの笑顔は、私じゃ作れない…」

その時だった。兄介が前転をしながらリビングに入ってきた。

「妹奈！」

「お兄ちゃん…！」

兄介は妹奈を優しく抱きしめた。

「ごめん妹奈、俺は酷い兄貴だ…」

「え…！？」

「俺は知らず知らずうちに、有りのままのお前を否定し、変わることを強要してしまっていた。本当に、ごめんな…」

謝罪を終えると、空美に見せたものとはまた別の、温かい笑みを浮かべる兄介。

「天井になんか張り付けなくてもいい。お前はお前のままで最高の妹だ。世界で一番、大好きだよ」

「お兄ちゃん…」

顔を真っ赤にしながら、妹奈は兄介の胸に顔を埋めた。

「あんた達…何してるの…！」

突然、母がリビングに入ってきた。

「こんな真夜中に兄妹でイチャイチャと…汚らわしいわアアア…！」

母はリビングを飛び出していった。

「妹奈、今回は放っておこうぜ」

「うん…」

なんと兄妹は母にツツコミを入れなかった。

「でもお兄ちゃん、一つどうしても放っておけないことがあるんだけど」

「ん？　もしかして俺が服を着てないことか？　今回はいいじゃ

ないか」

「そうだね…」

なんと兄介が全裸であることにもツツコミが入らなかった。
どうやら今回はこれといったオチの無いまま終わるようだ。たま
には和やかに終わるのもいいかもしれない。

「ちんこ」

「何言ってるのお兄ちゃん!!?」

はい、台なし。

妹奈VSガキ（前書き）

>i36158—210<

PS3とストIVを買いました。

まだまだ弱っちいけど、これから修業を積んで、厳しいオンラインの世界を勝ち抜いていこうと思います。

PS3で出るといいうギルティギアの最新作もとても楽しみです。

今回は作中に「山田さん!」という台詞を出してみました（笑

兄介が格闘ゲームで戦うという話も執筆中です。

妹奈VSガキ

「大根に、キュウリに、ジャガイモに……。よし、頼まれたものは全部買った!」

妹奈は商店街でおつかいを済ませると、家に向かって歩きだした。

公園に差し掛かった時だった。

「あつ、結坂さん!」

不意に、誰かが妹奈の名を呼んだ。

首を捻り、声の主を探す妹奈。

「あ、山田さん!」

妹奈を呼んだのは公園の砂場にいる同級生の少女——山田だった。

「山田さーん!」

妹奈は山田の元へ駆け寄った。

「結坂さん、おつかいの帰り?」

「うん」

「あたしは弟と遊んであげてるの」

山田の傍らでは四、五歳の男の子が砂の山を作っていた。

「ほら翔太、結坂さんに挨拶して」

姉に促され、男の子——翔太は妹奈に挨拶をした。

「こんにちは、お姉さん」

「こ、こんにちは、翔太君」

妹奈の顔が朱くなる。

（どうしよう、『お姉さん』なんて初めて言われちゃった！）

妹奈が感動していると、山田がなにやらモジモジし始めた。

「ごめん結坂さん、あたしトイレに行きたくなっちゃった。ちょっただけ、翔太のこと見ててくれないかな」

「あ、うん、いいよ。任せて」

「ごめん！」

山田はトイレの方へ駆けていった。

姉がいなくなると、急に翔太の顔つきが鋭くなった。

「お姉さん」

「なあに、翔太君」

「おっぱい触らせて」

翔太は妹奈の服に手を入れると、胸を触り始めた。

「ちょ…ちよつと…や…やめえええい！！」

妹奈の拳が翔太の頬に炸裂する。

それにより、翔太は頭から砂場に突っ込んでしまった。

「……はっ！ ご、ごめん翔太君！！ 私ったら、つい『いつもの癖』で！」

どうやら対兄介用のツツコミが発動してしまったらしい。

「うう…痛い…ちよつとふざけただけなのに…」

翔太は妹奈に抱き起こされた。

> i 3 6 0 7 0 — 2 1 0 <

「よくもやったな、糞ババア！」

> i 3 6 0 7 1 — 2 1 0 <

「な…！！ 糞ババア！？」

暴れだしそうな拳を必死に押さえる妹奈。

「翔太君ってさあ、お姉ちゃんの前では猫被ってるよね…」

「まあね。姉ちゃんは僕の態度が悪いとすぐ親に言いつけるんだよ。そのせいで僕はいつも親に怒られるんだ」

「そっか…厳しいご両親なんだね」

妹奈は翔太に同情の眼を向けた。

と、その時。

「隙あり！」

翔太は妹奈の買い物袋からキュウリを一本パクった。

「あ、コラ…！」

「へへーん！ あんたを虐めてストレス解消してやる！」

「返してよ！ それは今晚のおかずなの！」

キュウリを持って逃げる翔太を必死に追いかける妹奈。

「見て見て、ちんちん！」

翔太はキュウリをパンツの中に入れた。それによって彼の股間がピンツと突起する。

「ちよっと、何やってんの…！」

翔太のパンツに手を入れ、キュウリを取り出そうとする妹奈。

「うわああ…！！ やめろエッチ…！」

「うるさい！ 食べ物をもんなふうに扱っちゃ駄目なの…！」

「ふう、すっきりした」

トイレで用を足した山田が、砂場に戻ってきた。

「結坂さん、翔太を見ててくれてありがとう……………ええ!!?」
目の前の光景を目の当たりにし、山田は硬直してしまった。

「さあ、早く股の間にあるモノを出して!」

「やめろエロ女! 僕のパンツに手を入れるな!」

「いいから早く出すの! あなたの股の間にあるこれは、口に入るモノなのよ!」

「うえ、こんな汚いもん口に入れる気かよあんた!」

「もちろん皮を剥いて洗ってからよ!」

ハアハアと息を荒げながら、翔太のパンツの中のキュウリを取り出そうとする妹奈。

山田は慌てて翔太を抱き寄せると、妹奈に向かって声を上げた。

「弟のナニに何する気よ!! この変態女!!」

姉弟は妹奈に背を向け、走り去っていった。

妹奈はブランコに腰掛け、小一時間、啜り泣いたという。

妹奈VSガキ（後書き）

自分は精神的に不安定な状態に陥りやすいのですが、バカ話を考える時だけは明るい気持ちになります。
妄想は最高の精神安定剤です。

兄介と妹奈に会えて本当によかった^^

妹奈は変態なんかじゃない（前書き）

進撃の巨人を4巻まで読みました（遅）。
面白いです。

- ・話がシンプル
- ・緊張感がある
- ・大きな謎がある

この三拍子にやられました。

GANTZに近いものを感じます。

この小説にも巨人を登場させて、人が次々と食われていくシーンを描きたいです。

妹奈は変態なんかじゃない

「はあ…まさかこの話がまだ続くなんて…」

妹奈が浮かない顔で学校から帰ってきた。

「どうしたんだ妹奈、学校で何かあったのか!? 机の角でオナ
ってる所を誰かに見られたか!？」

心配そうな面持ちで兄介が尋ねる。

「お兄ちゃん…。なんかね…私、学校のみんなに変態だと思われ
てみたいなの」

「えっ、妹奈が変態!? アリだな!」

兄介はハアハア言いながら親指を立てた。

「何で興奮してんの! はあ…もう学校に行くのが嫌になってき
たよ…」

ふさぎ込む妹奈。

「変態と思われることがそんなに嫌なのか…。まあ年頃だもんな
年は関係ない。」

「でもどうしてみんなは妹奈のことを変態だと思ってるんだ?
何かきっかけはあったのか?」

「えっと…それは…」

妹奈は先日の『山田姉弟』との一件を話した。翔太のパンツの中
のキュウリを取り出そうとしたことが、あらぬ誤解を招いたのだ。

「なるほど、つまりその山田って同級生が、妹奈を変態だと勘違
いして学校のみんなに噂を広めてしまったんだな」

「たぶんそうだと思う…」

兄介は少しだけ考え込むと、妹奈の肩に手を置いた。

「よし、俺に任せろ! お前が変態じゃないってことをみんなに
分からせてやる!」

「お兄ちゃん…(大丈夫かな…)」

兄介はあまり信用されてなかった。

次の日。

妹奈はいつものように学校へ行った。すると二人の男子が彼女の元へ寄ってきた。

「結坂あ、お前山田の弟のチンコ舐めようとしたんだってな」

「エロいなあ、お前」

からかう二人に妹奈は「それは誤解だよ！」と憤りを露にした。だが妹奈がいくら言っても、二人は聞く耳持たずだった。

「ふ：二人共、やめなよ。結坂さんは変態なんかじゃない」

見兼ねた佳が恐る恐る妹奈をフォローするが、十メートル離れてゐるため誰にもその声は届かなかった。糞ヘタレ野郎である。

給食の時間になった。

向かい合わせられた机に、当番が次々と給食を配っていく。

スピーカーからは放送が流れ、本日の献立が紹介されていた。

『今日の献立は、五目ご飯、アスパラのベーコン巻き、味噌し：：うわっ！ 何だお前は！！ なぜ服を着ていない！！』

突然、放送が途切れた。
そして謎の声がスピーカーから流れ始める。

『全校生徒の諸君、聞いてくれ。妹奈は変態ではなァァい!!
』

どよめく校内。

何人かの生徒はその声の主に気付いていた。

「結坂さん、この声は…!」

「あはは! あの人だよね!」

佳と空美が妹奈の元へ駆け寄る。

「うん、間違いなくお兄ちゃんだよ…。ああ…それにしてもなんてストレートな方法を…」

> i 3 6 6 4 8 — 2 1 0 <

隣のクラスから華歩もやってきた。

「兄介さん、放送室をジャックしたみたいね。みんなで行ってみない?」

「そうだね…」

放送室へと歩きだす四人。

しかし…

「み、みんな、危ないから教室にいて! 放送室の様子は先生が見てくるから!」

担任の吉村が代わりに放送室へ駆けていった。

「先生はあれがお兄ちゃんの声だって気付いてないんだ…」

(こ…この部屋に…変質者が…)

そつと、放送室の扉を開ける吉村。中にいるのは衣服のロープで身体を縛られた放送委員と、パンツ一枚の男。

「…あ、結坂さんのお兄さん!？」

「お、妹奈の担任か」

「何をされてるんですか!？」

「実は妹の誤解を解きたくてな」

兄介は妹奈の置かれている状況を話した。

「そうだったんですか…結坂さんにそんな噂が…。ああ、私は教師失格です! 生徒が苦しんでることに気付いてあげられなかった!」

「そう思うなら先生も手伝ってくれ」

吉村の肩に手を置き、顔を近づける兄介。吉村は頬を朱に染めながら「はい」と頷いた。

再び、スピーカーから声が発せられる。

『みなさん、聞いてください。結坂さんは変態じゃありません。結坂さんはただ股間のキュウリを取り返そうとしただけなんです』

「あ、吉村先生の声！」

「お兄ちゃん、吉村先生を味方につけたんだね！」

「これで少しは説得力が増すわね」

確かに、正体不明の男の訴えよりも、生徒達から慕われている教師の訴えの方がずっと影響力がある。（この方法自体が有効かどうかはともかく…）

「吉村先生、自分が何をしているのか分かってるんですか！」

その頃、放送室には教頭とその他大勢の教員が集まっていた。

「教頭先生！ これは結坂さんを救うためなんです！ 教頭先生も協力してください！」

「…何があったか知りませんが、たった一人の生徒のためにここまでするのはやり過ぎではないですか？ こんなやり方に協力はできません」

「そ…そんな！」

吉村は眼鏡を外し、教頭に鋭い視線を向けた。怒ったらしい。

「よ…吉村先生…？」

吉村は怯える教頭につかつかと近づき、耳打ちをした。

「教頭先生、私知ってるんですよ。教頭先生が不倫してるって…」
教頭の顔が青ざめる。

スピーカーからまた声が発せられた。

『断言しよう、結坂さんは変態ではない！』

「おい、今度は教頭の声だぜ！」

「一体何なんだ今日の放送は！」

「結坂って奴が変態じゃないことはもう分かったっつーの！」
校内がざわめく。

「凄い！　ごり押しが効いてるみたいだよ結坂さん！」

「うん！」

妹奈達が安心しかけた、その時だった。

『いい加減なことばかり言わないでください！　私の弟は結坂さんに襲われたんですよ！』

スピーカーから山田の声が聞こえてきた。

妹奈を庇いまくる放送に納得がいかず、放送室へ抗議しに行ったのだろう。

山田の発言に対し、兄介が口を開く。

『だからそれは勘違いだと言っているだろう。妹奈はお前の弟がパクったキュウリを取り返そうとしただけなんだ』

『何でそう言い切れるんですか！ あなたはその場にいなかったじゃないですか！』

『その場にいなくとも分かるさ。俺の妹はお前の弟を襲ったりなんかしていない。なぜならあいつは……』

静まり返る校内。みんなが兄介の次の言葉を待っている。
さあ、とどめを決めるんだ、兄介よ！

『俺と、愛し合ってるからさ!!』

「何言っとなじゃー！ー！ー！！！！」

>i36649—210<

妹奈のツツコミが学校全体に響き渡った。

この日から妹奈は『近親相姦女』という、より不名誉な噂を学校でされることとなる。

妹奈は変態なんかじゃない（後書き）

めちやくちやな話だ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9529o/>

あにいも

2011年12月7日11時50分発行